市立函館博物館

研　究　紀　要

第26号

2016

序

このたび『市立函館博物館研究紀要』第26号を刊行する運びとなりました。

本号は、彫刻家であり挿絵画家としても有名な梁川剛一に関する論考を２本掲載しました。はじめに、日本児童文学学会北海道支部　谷　暎子氏の「戦後・札幌時代の梁川剛一－出版ブームにみる足跡－」、つぎに、当館学芸主査奥野　進の「梁川剛一資料の収集経過とその周辺」です。

谷氏は長年にわたり、児童雑誌や教育紙芝居など広く児童文学に関する研究をされてこられました。今回は当館にも資料が収蔵されている梁川剛一の挿絵について、札幌在住の制作活動に焦点を当て、当時の出版事情と照らし合わせて考察されています。奥野は、梁川剛一の資料が当館に寄贈されるいきさつについて、その経過と文化行政の動きについてまとめています。

「高田屋嘉兵衛像」や「鳳凰像」など、函館には梁川剛一の作品が残されています。今回の研究成果は、改めて函館と関係の深い梁川剛一とその資料について知っていただく上で役立つものと考えられます。

これらの研究論文等が、幅広く利用、活用されることを期待いたしますとともに、関係各位におかれましては、当館に対しまして忌憚のないご意見・ご提言をいただくようお願い申し上げます。

平成28年３月31日

市立函館博物館長
斉　藤　　総　一

― 目 次 ―

序

戦後・札幌時代の梁川剛一
―出版ブームにみる足跡―
谷　暎子……1

〈資料紹介〉
梁川剛一資料の収集経過とその周辺
奥野　進……31

戦後・札幌時代の梁川剛一

―出版ブームにみる足跡―

谷　　暎　子

はじめに

函館出身の梁川剛一は、２度、札幌で暮している。北海中学校在学時代と、戦後の疎開時代である。1945 年７月、札幌に疎開してきた梁川は、1949 年６月に東京に戻るまでの４年間、北海道で活躍した。本稿の意図は、戦後北海道の出版物に梁川剛一の作品を探索し、札幌時代の制作活動を検証することである。

戦後まもなくの出版物は散逸したものが多く、調査が難しい。とりわけ児童出版物がそうである。筆者は 1995 年から 2005 年まで米国・メリーランド大学プランゲ文庫で、検閲期（1945～1949 年）に刊行された児童書の目録化に携わることができた。その折、北海道で刊行された図書、雑誌、新聞を閲覧することができた。

美術に疎い筆者の気がかりは、梁川作品の評価に関することであった。そこで、当時の社会的・文化的状況、とりわけ北海道の出版ブーム、そして連合国軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP・General Head quarters Supreme Commander for the Allied Powers・以後ＧＨＱと略）の出版物検閲などを考え合せながら、梁川作品に向き合いたいと思った。

なお本稿は、2012 年に函館市文学館で筆者が講演した「戦後出版ブームにみる梁川剛一の足跡」を基に、その後の調査を経て執筆したものである。ちなみに 2012 年は、「梁川剛一生誕 110 年」で、その記念として講演会、展示会が開催された。

Ⅰ　梁川剛一の略歴

梁川剛一（1902～1986）は函館に生れ、小学校時代まで函館で育つ。中学校時代は札幌の北海中学校に学び、得意科目は物理、化学であった。美術クラブ「団栗（どんぐり）会」に所属して絵を描き、図書館（時計台）に日参するほどの読書好きだったという。また運動も得意で柔道、スキーなど何でもこなし、高学年には応援団の副団長にも引っ張り出されたと語っている。何にでも挑戦し、楽しんだ中学生時代だったようだ。

戦後・札幌時代の足跡を辿る前に、梁川剛一の彫刻家・挿し絵画家としての略歴を把握しておきたい。参考にしたのは、梁川剛一「造形六十年」『私の中の歴史』（北海道新聞社　1986 年）、『日本児童文学大事典』第２巻（大日本図書　1993 年）などである。

彫刻

梁川は 1923 年に、東京美術学校彫刻科塑造部（現・東京芸術大学美術部）で彫刻を学び、1928 年に主席で卒業。在学中に第７回（1926 年）帝展で処女作「競技」、第８回（1927 年）には「審判」が入選。卒業

制作コンクールで「懊悩」が１位となるなど、在学時から彫刻家としての活躍を嘱望されていた。

卒業後も毎年帝展に出品。第 15 回（1934 年）帝展で「平和工作の響」が特選になり、以後 1946 年まで無審査となる。彫刻作品では函館の「高田屋嘉兵衛像」や「岡田健蔵胸像」（1928 年）、長崎の「蝶々夫人」（1962 年）、北海道大学の「少年よ大志を抱け」（1979 年）などがよく知られている。

挿し絵

梁川が挿し絵を描くようになったのは、彫刻だけでは生活できないからだったと語っている。霜村紀子氏の調査によると、梁川の初めての挿し絵は「セウガク三年生」（1930 年５月号）に掲載の「動物のお節句」だという。その後、講談社の『少年倶楽部』に掲載の「少年探偵団」（江戸川乱歩）、「敵中横断三百里」別冊（中山峯太郎）で少年たちの心を掴む。他に世界名作物語の装幀、『巌窟王』など多くの挿し絵を描いた。こうした活躍に対し、1973 年に児童文学家協会の児童文化功労賞を受賞。1975 年には『梁川剛一挿画大集』（講談社）を出版している。梁川の略歴を簡潔にまとめたのが表１である。

Ⅱ　戦後の出版ブームとＧＨＱの検閲

１　北海道の出版ブーム

梁川が北海道で活躍したのは、出版ブームに沸いていた時期である。札幌を中心とした北海道の出版界の活況は、全国的にも注目されていた。それは、出版社数と出版物の多様性に端的に表れている。

1945 年７月に 10 社に満たなかった出版社が、1946 年には 28 社、1947 年には飛躍的な増加で 107 社、1948 年には 125 社に及んだ。地元の零細な出版社が大半を占めるが、出版の中心である東京から疎開してきた出版社もあった。東京は戦火による印刷設備の罹災率が最も高く 66.5％[(1)]だったという。こうした状況下で、日本出版協会は出版社に北海道、長野、九州などへの疎

表１　梁川剛一の略歴

年	事項	社会の動き
1902（明治35）	函館生まれ。小学校時代まで函館で育つ。	明治37・日露戦争。
1917（大正６） ～22（大正11）	札幌に移り北海中学校に学ぶ。物理や化学が得意で、読書、運動好き。美術クラブ「団栗会」に所属。	大正７・米騒動。
1923（大正12） ～28（昭和3）	東京美術学校彫刻科塑造部に学ぶ。第７回帝展（大正15）で「競技」、第８回帝展で「審判」入選。卒業制作コンクールで「懊悩」１等。	大正12・関東大震災。 大正14・治安維持法成立。 昭和２・金融恐慌。
1930（昭和5）	小学館の学習雑誌に挿し絵を描き始める。	昭和６・満州事変。
1936（昭和11） ～37（昭和12）	『少年倶楽部』別冊附録に「敵中横断三百里」、昭和12・「少年探偵団」の挿し絵を描く。講談社の絵本『リンカーン』を油彩で描く。	昭和12・日中戦争。 昭和16・太平洋戦争。国民学校令公布。 少国民文化協会設立。
1945（昭和20） ～49（昭和24）	５月の空襲で自宅を焼失。７月に札幌に疎開。昭和22年『北の子供』の表紙絵などを描く。藤居準一、塚本長蔵らとエルム社を設立し絵本などを出版。この間出版活動で活躍。	広島、長崎に原爆投下。ポツダム宣言受諾、太平洋戦争終結。昭和21・日本国憲法公布。ＧＨＱ・自由制限撤廃、メディア検閲。
1950（昭和25） ～51（昭和26）		朝鮮戦争。昭和26・サンフランシスコ平和条約締結。日米安保条約締結。
1973（昭和48）	児童文化功労賞（児童文芸家協会）を受賞。	
1975（昭和50）	『梁川剛一挿画大集』（講談社）を出版。	
1986（昭和61）	４月に死去。12月に梁川剛一記念美術館開館（平成元年閉館）。	

※参考文献・梁川剛一「造形六十年」『私の中の歴史』６　北海道新聞社　1986 年

開を奨めていた。

講談社は 1945 年５月に札幌に疎開、敗戦後には青磁社、霞ヶ関書房、鎌倉文庫、朝日新聞社､毎日新聞社など 20 社余が支社や出張所を設けて出版活動を展開していた。北海道は出版に欠かせない紙の生産地であり、戦火も少なく操業可能な印刷所が多かったことが要因である。児童出版物の刊行では、地元の作家らと共に、疎開していた梁川剛一、百田宗治（1893～1955）、原田三夫（1890～1977）が活躍していた。

『北海道出版物綜合目録』（日本出版協会北海道支部　1947 年）は、1947 年の出版文化祭を記念して刊行されたものである。この冊子の出版社一覧には、出版物のジャンルなども記載されている。絵本や漫画、児童誌や児童紙などの児童出版物を専門に刊行する出版社も存在していた。出版界の活況を背景に、児童出版物を刊行した出版社は 78 社、児童紙、児童誌、児童書、紙芝居など、現時点で 279 タイトルに及ぶ。このように多種多様な児童出版物が多量に刊行されたのは、北海道では稀有なことである。

2　ＧＨＱによる出版物検閲

敗戦後、ＧＨＱは日本の民主化をすすめるために、治安維持法、思想警察・特高の廃止、思想犯の解放などを指令。言論統制が解かれ、言論の自由が保障されたと思われていた。だが一方では、あらゆるメディアの検閲を行っていた。出版活動は、そうした矛盾の中で行われていたのである。

ＧＨＱによる検閲は、1945 年９月から 1949 年 10 月まで行われた。出版物の検閲は民間検閲局（CCD ・Civil Censorship Detachment）の出版・映画・放送課(PPB・Press Pictrial and Broadcasting Division)が担当していた。検閲で問題がなければ出版を許可されたが、違反に問われると事前検閲では「公表禁止」(Suppress)、「削除」(Delete)など、事後検閲では「不許可」(Disapproved)などの処分を受けた。

検閲済の出版物は、現在、米国のメリーランド大学プランゲ文庫に所蔵されている。その内訳は次のようである。

図書、パンフレット……82,000冊
新聞　……16,000ﾀｲﾄﾙ
雑誌　……13,000ﾀｲﾄﾙ
その他　……地図、楽譜、ポスター、
報道写真など。

当時の出版物の全てとは言えないが、地方出版物を含む、新聞、雑誌、図書、楽譜、パンフレットなどを網羅する貴重な資料群である。残念だが占領下の出版物を、これだけ所蔵する機関は日本にはないのである。国立国会図書館でさえ、その２割を所蔵するに止まるという。プランゲ文庫が日本の戦後史資料の宝庫と言わる所以である。

Ⅲ　出版物にみる梁川剛一の足跡

梁川は 1945 年５月の空襲で東京のアトリエ・自宅を失い、７月に家族と共に妻の実家のある札幌へ疎開。そして 1949 年６月に東京に戻るまで、挿し絵画家として仕事をしている。次に当時の雑誌､図書などに、その足跡を辿ってみる。

1　雑誌の表紙絵、挿し絵など

プランゲ文庫に所蔵されている雑誌の出版点数を見ると、１位は出版の中心地である東京、次いで大阪、そして３番目が北海道である。

『北海道出版物綜合目録』によると、道内で発行された雑誌は 1947 年５月の時点で 78 誌を数える。文芸誌､科学誌､医学誌、農漁村文化誌、婦人誌、青年誌、児童誌など、あらゆるジャンルにわたっている。

(1) 『北の子供』（財団法人新日本文化協会）

児童誌『北の子供』は新日本文化協会が1946年４月に創刊。1950年１月まで続き、北海道の子どもたちに親しまれた。戦後北海道の代表的な児童誌で、北海道の児童文学・文化の発展に大きな役割を果たした。

「文芸味豊かなもの」「平和的な人間的教養」「子供の作品を取上げて育てる」方針で編まれた。童話、絵物語、童謡などの文芸、評論、郷土の頁、そして作文や詩などの投稿欄などで構成されている。執筆者には北海道内の文学関係者、学者、画家たちの協力があった。また疎開作家の百田宗治は児童詩の選評を、梁川剛一は表紙絵、絵物語などを制作している。

『北の子供』全38冊のうち、梁川が描いた表紙は30冊で、東京に戻ってからも、最終号まで描き続けた。



「こいのぼり」（1948年5月号）【個人蔵】



「クリスマス」（1948年12月）



「サクラ咲く頃」（1949年5月号）【個人蔵】



「時の記念日」（1949年6月号）

表紙絵

梁川が描いた表紙のテーマは「行事や季節」「子どもの楽しみ」「お手伝い・労働」に類別できる。まず、子どもの行事や季節を描いたものを見よう。

児童誌には、子どもの行事や季節を描いたものが多い。「こいのぼり」は、端午の節句として男児の成長を願う行事だが、1948年に「こどもの日」として祝日に制定された。「クリスマス」は戦後、子どもの生活の中にも定着した行事で、梁川は1947年12月と1948年12月の２度描いている。

東京で発行の児童誌は３月、４月号に登場する桜だが、周知のように北海道の桜の開花は５月。梁川は北海道人の感覚で、５月号に「サクラ咲く頃」を描いている。「時の記念日」は６月10日の「時の記念」がテーマで、この頃は記念行事が催されていた。ちなみに表紙の女児は梁川の次女・美恵子氏がモデルだという。

「海風を浴びて」「炊事遠足」「優勝を期して」「スキー」は、当時の小学生の楽しみを描いたものである。筆者の小学生時代の楽しみと重なり感慨深かった。春には炊事遠足、冬はスキー遠足。夏には家族と海水浴に行くのが待ち遠しく、春から秋にかけては、近所の友達と公園でソフトボールを楽しんだ。梁川は、娘や息子たちの学校生活や遊びから着想を得たのではないだろうか。



「海風を浴びて」（1949年8･9月号）【個人蔵】



「炊事遠足」（1948年6月号）



「優勝を期して」
（1949年10月号）【個人蔵】



「スキー」
（1948年2月号）

次の４点は「お手伝い・労働」する子どもたちの姿を描いたものである。「僕たちも一人前」と「収穫」は、農作業をする子どもたち、牧場でミルク缶を運ぶ子どもたち、そして雪かきをする子どもたちが登場する。



「僕たちも一人前」
（1947年11月号）【個人蔵】



「収穫」
（1949年11月号）



「ミルク缶を運ぶ」
（1948年10月号）【個人蔵】



「雪降りそめて」
（1949年12月号）

労働する子どもたちが、児童誌の表紙に登場するのは稀である。『北の子供』投稿欄には、手伝い・労働する子どもたちの作文や詩が掲載されている。梁川は投稿欄もよく読んでいたと思われる。また講演などで地方に出かけた折、農漁村などで働く子どもたちを目の当たりにしたのであろう。家族が多く、稼業や家事も手仕事だった時代のこと、子どもの手伝い・労働は欠かせないものであった。

梁川の絵は、子どもたちが生き生きと働く姿、「僕たちも一人前」と誇らしげに働く子どもたちを捉えている。ちなみに表紙絵の題も、梁川によるものである。

絵物語

色刷の絵物語は、用紙事情が少し良くなってきた時期にはじまる。1948 年８月号から 1949 年９月号まで「世界名作童話」として 12 作品が掲載された。「ガラスの小沓」は童話作家の和田義雄（1914～1984）、「金の鳥」など５作は詩人・英文学者の和田徹三（1909～1999）の翻案である。色刷りの絵物語を読者は楽しみに待っていたに違いない。梁川が描いたのは次の６点である。「イワンの馬鹿」の久我恭介は、梁川のペンネームの一つである。

・グリム童話「金の鳥」1948年９月号
・トルストイ「イワンの馬鹿」1948年10月号
・アミーチス「愛の学校」1948年11月号
・マロー「家なき児」1948年12月号
・マークトウェイン「ハックルベリー物語」1949年１月号
・フランス童話「ガラスの小沓」1949年４月号



「金の鳥」
（1948年9月号）【個人蔵】



「イワンの馬鹿」
（1948年10月号）



「家なき児」
（1948年12月号）【個人蔵】



「ガラスの小沓」
（1949年4月号）

梁川は大日本雄弁会講談社の『巖窟王』（1937 年）、『鐵假面』（1938 年）の挿し絵を手がけて以来、多くの世界名作物語の挿し絵を手がけている。戦後、さまざまな制約の中で描かれたものだが、梁川が物語の世界を絵に表現することに秀でた画家であることを改めて知ることとなった。

『梁川剛一挿画大集』に、梁川の「わたしの挿画論」が収録されている。挿し絵は「元来文章の内容からその一場面を視覚的効果によって浮き彫りさせるために挿入する絵」であり、「作家の表現意図を十分理解し文章に忠実であるとともに、画面に表現しようとする事物のすべてにたいしても忠実に熟考して表現」(2)することを忘れてはならないと述べている。

（2）『中学生』（北海道教育図書出版）



『中学生』創刊号
【プランゲ文庫蔵】

『中学生』は学習誌である。1948年10月に北海道教育図書出版が創刊。だが、この号だけで終わったようだ。創刊号はプランゲ文庫に所蔵されているが、国内に所蔵機関はない。

（3）『青年時代』（桜菊書院北海道支部）、『北海青年』（北海青年社）

『青年時代』の編集人は石附忠平、発行は桜菊書院北海道支部、発売所は北海教育評論社である。1947 年４月号から『北海青年』と改題し、北海青年社の発行となった。編集人は吉川英一、発売所は『青年時代』と同じ北海教育評論社である。

『青年時代』『北海青年』は、石附忠平（1894～1981）が力を注いだ雑誌である。石附は北海道師範学校本科を卒業し、札幌山鼻小学校などで 10 年余、教育に携わる。その後、教育界の先輩である高坂久喜（函館師範卒）に請われ『北海道小学新聞』の編集、後に北海教育評論社の編集主幹となり『北海教育評論』の編集など教育出版事業で活躍した。1958 年に北海道教育功労者賞、1962 年に北海道文化賞を受賞している。

『北海青年』に改題した２巻３号、４号の表紙には、「青年時代　革新道青合同」と表記されている。「青年時代は青年學校の生徒を對象として發足し、又革新道青は青年團体運動の推進を目指して發足した」もので、「青年學校制度改革を機として両者が合同」するに至った(3)という。

表紙絵

『青年時代』の表紙絵は次の２種である。1947 年１月号の表紙は、男女が共に活躍す

る青年活動を目指していた戦後を象徴するような表紙で印象深い。





1947年1月号　1947年2・3月合併号
【出村文理氏蔵】

表紙絵

『北海青年』は、『青年時代』の編集を踏襲したものである。梁川の表紙絵は次の４種で、２カ月ずつインキの色を変えて印刷されている。





1947年5月号　1947年7月号
【出村文理氏蔵】

『北海青年』の表紙には、働く青年男女、登山する青年男女の姿が描かれていて『青年時代』とは趣を異にする。『青年時代』の２・３月合併号には男性が開いた本を膝に置きながら思索する姿が描かれているが、『北海青年』で描かれているのは読書する女性である。５月号は農作業の休憩時に夢中で読書する女性。７月号では、収穫した野菜の上に読みかけの本が伏せてあり、続きを読みたいという女性の気持ちが伝わってくるようだ。





1947年10月号　1947年12月号
【出村文理氏蔵】

読書する姿が描かれた背景には、1947 年に展開されていた「新日本建設運動」がある。この要項には、「勤労意欲の向上」「自立精神の養成」「芸術、宗教及びスポーツの重視」「平和運動の推進」など７項目が掲げられている。青年男女は、その担い手として期待されていたのである。

また読書への関心も高く、日本教養組合聯盟による教養獲得の社会化運動が全国各地で展開されていた。『青年時代』『北海青年』の裏表紙には、その広告が掲載されている。雑誌や図書を容易には購入できなかった当時、会費制で「中央委員が選択した新刊良書と、「世界」「リーダーズダイジェスト」等の雑誌を」(4)郵送で配本していた。東京に本部があり、北海道支部は札幌の北方民生協会に置かれていた。教師、婦人、学生、青年、子どものサークルが開設されていたようだ。青年サークルは、農山漁村と都市工場に開設されていたという。

また第４回全国青年連絡協議会（岡山県で開催）の女子部会の議題は、「現代女性の在り方」「家庭の民主化に於ける女性の在り方」「女子の自主性の確立について」「女子の社会性について」(5)などだったと報告されている。

青年男女が共に活動できる社会を目指して、読書を通して教養を深め、知性・人間性を高めようとしていたといえよう。梁

川の表紙絵は、そうした青年たちの姿をよく捉えている。とりわけ、読書が奨励されることのなかった女性を描いていて感慨深い。

(4)『海』（北海道漁村文化協会）

『海』は北海道漁村文化協会の機関誌である。その前身は漁業者対象の娯楽文化誌として1946年５月に『海の自由』が創刊され、後に『海の光』と改題。北海道漁村文化協会の委託で、北東日本厚生協会が編集・発行していた。

1947 年２月に北海道漁村文化協会の編集・発行となり、『海』と改題された。梁川は創刊号から表紙絵、連載小説「朔風」の挿し絵、読者文芸の挿し絵を担当している。また随筆（絵と文）２篇を寄稿している。

表紙絵

漁業に携わる夫婦は共働きで、男性は海へ漁に、女性は漁の安全を願いながら家事をこなし、船が戻ると浜で働く。梁川は表紙に浜で働く女性たちを描いた。年齢も経験もさまざまな女性たちをよく捉えている。背負子で魚を運ぶ女性、合間に授乳している母親など、どの絵にも、梁川の働く女性への、あたたかな眼差しを感じる。

なお『海』の巻号表示は、統一されていないのでわかりにくい。ここでは、表紙の表示と刊行年月を併記した。



創刊号
（1947年2月）
【プランゲ文庫蔵】



四月号
（1947年4月）
【北海道立図書館蔵】



第四号
（1947年10月）



第五号
（1947年12月）
【プランゲ文庫蔵】



第二巻第二号
（1948年4月）



第二巻第三号
（1948年8月）
【プランゲ文庫蔵】

随筆・絵

２篇の随筆は、梁川が漁村を歩き、抜海（現・稚内市抜海）の地に立ってスケッチし、感じ考えたことをまとめたものである。

雑誌には掲載されていないが、他に梁川がスケッチした「摩周湖見晴台」(1946 年)、「（江別）火力工場」（1947 年）が、市立

函館博物館に所蔵されている。



「抜海の繪に題する」
（1947年10月号）



「漁村所見」
（1947年12月号）

【北海道立図書館蔵】

挿し絵　新田順の「朔風」

連載小説「朔風」は、択捉への航路を拓き、またゴローニン事件の解決に貢献したことで知られる高田屋嘉兵衛の伝記である。梁川は連載８回の挿し絵を担当している。

筆者の新田順（1913～1957）は、小説家の西田喜代司のペンネームである。西田は戦時に札幌に疎開し、戦後『札幌文学』を創刊。編集・発行人として、私財を投じて情熱を注いだという。

ところで『海』創刊号の「人民のための政治」が、ＧＨＱ の事前検閲で「公表禁止」処分を受けている。事由は「反民主主義プロパガンダ」であった。

内容は戦前・戦中の封建的独裁政治を批判し、民主政治について解説したものである。ゲラ刷から検閲で問題にされた３カ所を要約すると、①「民主政治が最高の政治形態だということにはならない」。②欧米での「民主主義、自由主義、個人主義は、資本家と財産家」のものである。③「資本主義社会においては常に政治の実権は資本家の手に握られる」。そして「人民大衆の真の解放を求める道」は「社会主義である」と結んでいる。(6)こうした論調が、反民主主義プロパガンダとされたのではないか。

「公表禁止」処分なので、発行所は「人民のための政治」を掲載できず、代わりに「コブ茶談義」（塚本長蔵）を収録している。ＧＨＱの検閲では、刊行本には検閲の痕跡は残らない仕組みになっていた。したがって検閲で「公表禁止」になったことは、ゲラ刷と検閲文書を見ない限り知ることはできない。

(5)『週刊朝日』北海道版（朝日新聞社）

『週刊朝日』北海道版が発行されていたことは、あまり知られていない。北海道版といっても、大阪で編集の『週刊朝日』に、北海道出版支部が編集した「北海道のページ」・４頁を加えたものでる。

『朝日新聞出版局史』（1969 年）には、北海道版について次のように記されている。

> 北海道に出版支部（昭和21・5～22・7）が設けられ、（略）『週刊朝日・北海道版』を製作・販売する。部数二万八千、用紙対策一つであった。(7)

当時、印刷用紙は配給制であった。「敗戦直後の雑誌にふれるには、まず用紙事情から始めなければならない」(8)と言われるほど、用紙獲得は出版社にとって難題であった。

確認できた北海道版は、1946 年３月 10 日号～1947 年４月 20 日・27 日号である。1947 年は用紙事情がもっとも厳しい時期で、新聞や雑誌、図書にも仙花紙が使われていることが多い。同年１月からは、「文化的価値判断」「社会的有用度」に基づく用紙割当になった。『週間朝日』北海道版も 1947 年 20 日・27 日号から合併号で、月２回の発行にせざるを得なかったという。

わずか４頁の「北海道のページ」だが、内容は魅力的なものである。北海道や中央

の作家らの随筆など、そして北海道各地の文化情報などを知ることができる貴重な資料でもある。

筆者が『週刊朝日』北海道版、『こども朝日』北海道版に出合ったのは、メリーランド大学プランゲ文庫であった。閲覧して思わぬ発見があり、夢中で読んだことを思い出す。ここでは吉田一穂と小山内龍について取りあげたい。

詩人の吉田一穂（1898～1973）の、「楡（エルム）の誓（ちかひ）」についてである。一穂は木古内生まれで、古平町で少年時代を過ごしている。『週刊朝日』北海道版・1946年6月2日に掲載のこの詩は、北海道を詠った「楡」の初期形であることがわかり、「北海道文学館報」第61号[9]で報告した。50年もの間、研究者の目にとまらなかったのは、地方限定の週刊誌だったからであろう。

漫画家・絵本作家の小山内龍（1904～1946）の作品も掲載されていた。小山内は東京で戦火にあい、1945年7月に大野村（現・北斗市）に疎開していたが、病で翌年42歳の若さで他界している。

北海道版1946年5月12日号には、大野村の春と人々の暮らしを書いた随筆「村春の歌」を寄稿している。また同年10月20日号の「子供のページ特集」には、漫画「きつねくんとたぬきくん」が掲載されている。筆者が後に「小山内龍の大野村」[10]を書くきっかけとなった出合いであった。

表紙絵

梁川の表紙絵は1946年11月24日・12月1日合併号、そして1946年12月22日・29日合併号で、編み物をする女性などを描いている。

北海道版の表紙は、実に興味深い。およそ半数が本州版の表紙とは異なり、道内在住の画家たちが描いているからである。若い画家たちがのびのびと描いた表紙絵は、



1946年11月24日・
12月1日合併号
【北海道立文学館蔵】



1946年12月22日・
12月29日合併号
【北海道立図書館蔵】

画家たちの個性に触れることができ、当時の北海道の風俗などを知ることもできる。

北海道の画家―能勢眞美、川上澄生、高橋北修、中村善作、岩船修三、小川原脩、今田敬一、繁野三郎、伊藤信夫、池谷寅一、他に中根光一（1905～1972）と交流のあった画家たちが表紙絵を描いていたことを知った。芸術の森美術館で、2000年10月～12月に開催された「中根邸の画家たち－戦中・戦後の札幌洋画事情」でのことである。

中根邸とは、札幌の中島公園に隣接する中根光一の屋敷のことである。中根は父の遺産を受け継ぎ、絵画の収集、疎開画家たちへの支援、そして「札幌洋画研究所」を開設して美術家を育てるなど、北海道の美術界に貢献した人として知られる。

中根邸の「洋画研究所」で講師として協力していた三雲祥之助、小川マリ、田中忠雄、松島正幸（正人）、また中根と交流のあった田辺三重松、国松登、本間莞彩、居串佳一らも表紙絵を描いている。

北海道の出版ブームでは、画家たちも大いに活躍していた。

随筆と絵

「北海道の女性と美」は、1946年12月22・29日合併号に掲載されている。女性の美についての、梁川の見解が述べられていて興味深い。

最適なる背景と雰囲の中に混然と融け合って、しかも生命のための営みにはつきりとした目標を與えそして思考し、あるいは行動する時においてはじめて最大の美を第三者が發見するものではないだろうか。かかる意味において北海道大自然をその背景とし、虚飾なく、欺瞞なく、有るがままの心と形の姿の上に北海道特有な美を幸福な彼女らはもつているのだと思う。故に都会よりも小都市、あるいは田舎に多く見受けられる。(11)

梁川が描いた『北海青年』『海』などの表紙の女性たちは、彼が出会い心を動かされた北海道特有の女性たちの美であったことを知ることができた。



「北海道の女性と美」『週刊朝日』北海道版
(1946年12月22・29日合併号)
【北海道立図書館蔵】

(6)『子ども朝日』―北海道版(朝日新聞社)

『子ども朝日』北海道版も、『週刊朝日』北海道版と同様に、用紙対策の一環として発行されたものである。広告には、「中見開きの四頁を郷土色豊かな現地編輯のオフセット色刷として十一月から現地発行」(12)とある。だが発行された期間は短く 1946年11月1日号から1947年3月15日号までである。しかも発行日は1日と15日の月2回で、10冊の発行に止まっている。



「雪の上の動物の足跡」　犬飼哲夫・文
(1947年1月15日号)
【北海道立文学館蔵】

1947年1月15日号に、梁川は「雪の上の動物の足跡」(犬飼哲夫)を描いている。犬飼哲夫は、雪の上に残された動物の足跡を見ると、どのような動物が、どの方向に向かったのか、どこに隠れているかを見分けられると解説している。梁川にとっては、苦労した絵だったのではないだろうか。

(7)『健民』(北東日本厚生協会)

梁川は、随筆「新日本のルネッサンス」と「彫刻談義」を寄稿している。「彫刻談義」では「彫刻の発生」「彫刻の特性」「立体感と量感」について、「新日本のルネサンス」では、戦中の日本を省み戦後復興について言及したものである。

『健民』の前身は 1935 年に創刊の『北海道衛生』(北海道衛生協会)で、後に『北海道樺太衛生』(北東日本厚生協会)と改題。さらに1944年8月に『健民』となった。敗戦後は総合誌として 1949 年2月号まで続いた。

(8)『ばとん』(財団法人子供の国)

梁川は随筆「婦人と彫刻」を寄稿している。日本はヨーロッパにくらべ、彫刻の創作、鑑賞ともに女性との関係は縁遠いと言い、彫刻の歴史を辿り、また作品を通して彫刻と女性の関わりに言及したものである。

『ばとん』は、財団法人子供の国が創刊した婦人雑誌である。『ばとん』が目指していたのは、「母や母となるべき人の教養を助ける」[13]ことだという。「文化教養」としての時事解説、女性講座など、「生活技術」としての医学・衛生、洋裁、料理など、そして「文芸」欄は、小説、随筆、映画などの記事を載せていた。巻頭言を執筆したのは、子供の国の理事・佐藤喜一郎（共同通信社札幌支店長）である。

『ばとん』を発行していた財団法人子供の国の主な出版物は、子どものための科学新聞であった。1946年5月に科学新聞『子供の國』を創刊、7月には『こどものくに幼年版』も加わった。1949年7月には2紙を合併し、『子供の國科学新聞』として1950年3月まで発行された。

主幹は札幌に疎開していた、科学ジャーナリストの原田三夫である。原田と親交のあった北海道大学理学部の教授陣などが、執筆者として原田を支えていた。

ところで雑誌検閲用紙（MAGAZINE EXAMINATION）には、“Possible Information” “Movies Reports”など5つのチェック項目がある。『ばとん』1947年4・5月掲載の「ハリウツドの周囲」（岡俊雄）は、“Movies Reports”の調書が作成されている。検閲ではアメリカ映画の紹介も、情報としてチェックされていたことがわかる。

3　絵本

(1) エルム社の絵本

梁川によると、藤居準一から共同で絵本を創らないかと誘われたという。藤居は紙類、事務用品などを扱っていた日東商事の経営者であった。藤居と懇意にしていた太田武は、札幌市内の小学校長を勤めたことのある教育者。塚本長蔵（1893～1981）は札幌師範の学生時代から口演童話で活躍し、児童文化活動に携わっていた。そして梁川も加わった4人で立ち上げたのがエルム社である。太田が編集、塚本は物語、梁川が絵を、藤居は販売を担当していたという。

エルム社は、「一バン上品で、一バン綺麗で、一バン為になる」児童書を出版すると宣伝している。計画では「幼児向」の「コドモエホン」と、「少年少女向」の「絵本よみもの」の2種である。だが実際には、他に『絵本イソップ』や『絵本アラビアンナイト』（3冊）なども刊行している。

コドモエホン
- 『土の唄』　1946年5月
- 『みどり児の歌』　1946年9月
- 『コビトノクニ』　1947年3月
- 『ピノチオ』　1947年7月
- 『あいうえ王のかぎ』　1948年5月

絵本よみもの
- 『不屈魂』　1946年12月
- 『この努力この栄冠』　1947年4月
- 『白ゆり紅ばら』　1947年8月
- 『コーカサスのほりょ』　1947年8月
- 『ぼくらの放送局』　1947年9月
- 『寶くらべ』　1948年2月
- 『犬物語』　1948年8月

その他
- 『絵本イソップ』　1946年6月
- 『絵本アラビヤンナイト　アリババと四十人の盗賊』　1946年11月
- 『絵本アラビヤンナイト　シンドバットの冒険』　1947年1月
- 『絵本アラビヤンナイト　アラジンのランプ』　1948年5月
- 『はやがわりエホン　のりもの』　1947年

梁川が描いたエルム社の絵本は、確認できたもので上記17点である。そのうち『みどり児の歌』は、札幌中央放送局一等当選の板谷節子の作歌に梁川が絵を描いたもの

である。『あいうえ王のかぎ』と『のりもの』は絵・文とも梁川の作で、他は塚本長蔵の文、梁川の絵になる絵本である。

近刊予告にある「山は呼ぶ」「サンタクロース」、そして遊び道具の「世界名作家族合せ」は確認できていないので、あるいは刊行されなかったのかもしれない。他に梁川が絵を描いた「世界偉人カルタ」で遊んだという証言があるのだが、現物は見つかっていない。遊び道具のカルタは、絵本より残りにくいものである。



『土の唄』　梁川剛一・野村秀雄・新妻清（1946年）



『あいうえ王のかぎ』梁川剛一（1948年）

【北海道立文学館蔵】

「コドモエホン」は、幼児向きに発行された絵本である。『土の唄』はエルム社が最初に刊行した絵本で、童謡「ユキヤコンコン」「オオサムコサム」などに梁川剛一、新妻清、野村秀雄が絵を描いている。署名はないが、表紙は梁川の絵と思われる。

おそらく印刷所は、初めて絵本を手がけたのであろう。線と彩色のズレがあり、技術的な未熟さがみられる。梁川は「紙は粗末で印刷もおそろしく旧式なものであった」(14)と語っている。おそらく、画工が原画を転写し、色分けして製版・印刷する描き板だったと思われる。当時、造形教育に熱心に取り組んでいた故・伊藤恵氏は、札幌時代の梁川について、次のように語って下さった。

> 梁川先生の教えを乞いにお訪ねしたとき、ちょうど印刷屋さんと打合せとしているところでした。線や色彩など、詳しく細かい指示をだされていて驚いたものです。

梁川は、長年にわたる挿し絵などの印刷・出版の経験から得た知識や技術で、印刷所の人々を指導していたようだ。吉崎元章（芸術の森美術館）は、札幌時代の絵について、次のように述べている。

> この頃の挿し絵は、それまでみられなかった輪郭線と平面的な色彩処理により明らかに一線をかくす。かなり旧式の粗末な印刷機しかない時代であったため、それを使っての最大限の印刷効果を考えての原画制作だったのだろう。(15)

確かに現存するエルム社の絵本をみても、最初に刊行の『土の唄』を除いて、印刷技術の未熟さを感じさせないほどの仕上がりである。

「絵本よみもの」は少年少女（小学校３・４年生）向に刊行された。Ｂ５判で 14～22 頁と、「コドモエホン」より頁数が多い。『この努力この栄冠』は、アメリカの大統領・ガーフィールド、盲目の琴演奏家・今井慶松、辞書『言海』を編んだ大槻文彦らの伝記である。





『この努力この栄冠』　『白ゆり紅ばら』（1947年）【個人蔵】





『はやがわりエホン　のりもの』（1947年）
【プランゲ文庫蔵】

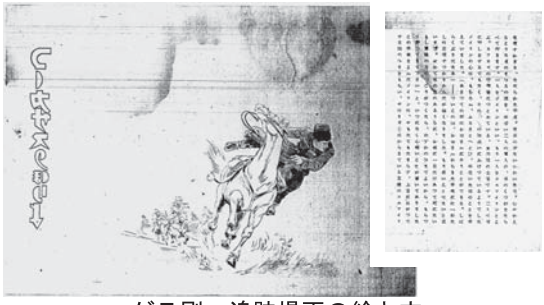
『のりもの』表紙には、「はやがわりエホン」と「ふろく　くみたて豆ジープ」の表示がある。絵本の中に組みたて図が印刷されていて、切り取って組みたて遊びが楽しめるように工夫されている。発明好きの梁川の発想ではないだろうか。図解入の「豆ジープ」の作り方は、裏表紙に載っている。

エルム社の絵本は、「コドモエホン」より「絵本よみもの」によいものがある。とりわけ『コーカサスのほりょ』が優れている。ダッタン人がコザック兵２人を捕え、足枷をして物置に拘禁。退屈まぎれに井戸端にある粘土で、人形や動物を作る。ダッタン人の少女が、人形を見つけ、布で包み揺すりながら子守唄をうたって遊ぶ。人形を作るコザック兵を大好きになった少女が、彼等の逃亡を助ける話である。

人形を愛でる少女の表情をとらえた表紙絵や挿し絵、加えて馬で逃げるコザック兵を追跡する場面は、梁川の得意とする躍動感あふれる絵、そして夜道を逃亡するコザック兵の場面はシルエットで表現し、観るものをひきつける。『コーカサスのほりょ』の刊行本は北海道立文学館に、ゲラ刷は市立函館博物館に所蔵されている。そのいくつかを掲載する。



『コーカサスのほりょ』（1947年）
ゲラ刷の表紙絵　【市立函館博物館蔵】
刊行本の表紙絵　【北海道立文学館蔵】



ゲラ刷・追跡場面の絵と文
【市立函館博物館蔵】

このゲラ刷は、民間検閲局（CCD）から出版社に返却されたものである。事前検閲では、ゲラ刷２部に発行届を添えて民間検閲局に提出した。『コーカサスのほりょ』のゲラ刷は、絵は逆版、文はタイプ印刷されたもので、レイアウトされていない状態のものである。

検閲にパスすると１部は出版社に返却され、１部は刊行本と照合するために民間検閲局に保管された。出版社はゲラ刷が返却されてはじめて、印刷・刊行することが許されたのである。完成した絵本は、再び検閲に提出することになっていた。しかし『コーカサスのほりょ』の刊行本は、なぜか、

プランゲ文庫には所蔵されていないのである。それだけではない。梁川の描いた 17 冊のエルム社の絵本のうち、プランゲ文庫が所蔵するのは７冊にとどまる。



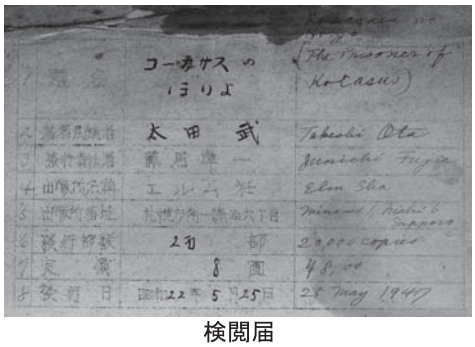
刊行本・追跡場面
【北海道立文学館蔵】



刊行本・夜道を逃げるコザック兵
【北海道立文学館蔵】

なぜなのか、現時点で理由をつまびらかにするのは難しい。だが７冊が提出されているので、出版社が検閲に提出しなかったとは思えない。もし提出しなければ出版は許可されないし、検閲を受けずに販売すれば制裁を覚悟しなければならないからである。出版社がそうしたリスクを犯すとは考えにくい。

北海道の出版社は、第一地区検閲局（東京）にゲラ刷や刊行本を郵送して検閲を受けていた。プランゲ文庫に所蔵がないのは、検閲局に郵送中、検閲終了後、プランゲ文庫に輸送の際などに失われたのだろうか。現時点では確かめる術がない。



検閲届
【市立函館博物館蔵】

絵本の発行数は『のりもの』（黒崎義介）で 15,000 部、『コーカサスのほりょ』で 20,000 部である。発行数の記録は２点のみだが、他の絵本も１万～２万部の発行だったと推測する。

(2) 北海道出版社の絵本

『北海道出版綜合目録』には、北海道出版社の代表者は武藤鉄寿、出版部門は「文学・社会」とある。武藤は新日本文化協会の専務理事で、『北の子供』創刊時の編集者でもあった。おそらく新日本文化協会を退いて、北海道出版社を興したと思われる。

実際に刊行されたのは児童書３点である。アレクサンドル・デュマの『鐵假面』『巖窟王』の２点は、絵本形態（Ｂ５判）の「青少年世界名作絵読本」として刊行された読み物である。絵は梁川、文は椿達彦だが、原作者は表示されていない。プランゲ文庫には『鐵假面』は所蔵されているが、『巖窟王』はなぜか所蔵されていない。

名作絵読本は、エルム社の絵本とは趣を異にする。青少年を意識した斬新な絵本づくりに、梁川の表現の豊かさを見る思いだ。表紙は赤、黒が中心で、飾罫を効果的に使っている。表紙裏には梗概と主な登場人物の紹介、そして扉絵も凝ったものである。続いて物語の前に、カラーの口絵が数頁も続く構成で、キャプションはローマ字である。ローマ字教育がはじまったばかりの当時、そのニーズにも注目したのであろう。

物語本文にスペースを使い、細長の挿し絵を上段に配置している。当時の絵本の中でも、モダンな仕上がりが際立っている。



『巖窟王』表紙
（1947年）
【北海道立文学館蔵】

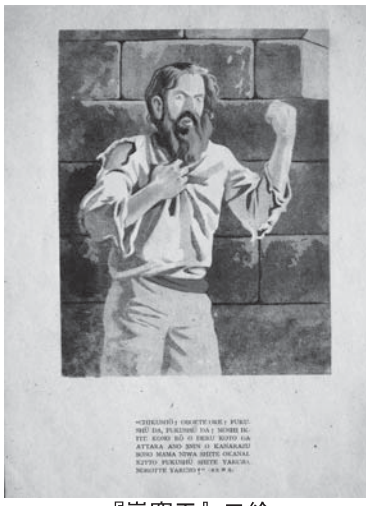


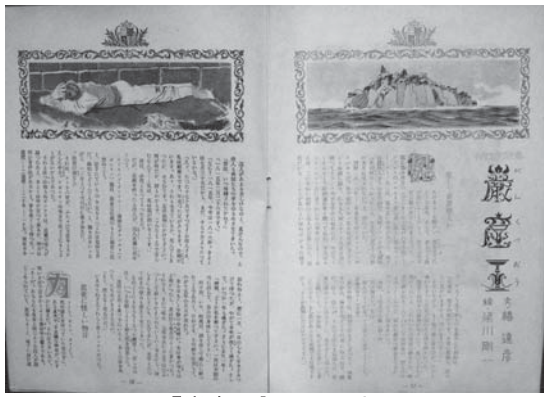
『鐵仮面』表紙
（1948年）
【プランゲ文庫蔵】


『巖窟王』登場人物紹介欄



『巖窟王』扉絵


『巖窟王』口絵


『巖窟王』レイアウト

4　紙芝居

『北の子供』を発行していた新日本文化協会の前身は、1941 年創立の北海道教育紙芝居協会であった。

1945 年 12 月 1 日の『北海道新聞』の広告欄には、北海道教育紙芝居協会と新日本文化協会の挨拶文が掲載されている。要約すると、1941 年 12 月に創立の北海道育紙芝居協会を解散し、財団法人新日本文化協会紙芝居部として再発足することになったと伝えている。

戦時、紙芝居は戦意高揚のメディアとして、教育施設、公共施設、工場などさまざまな所で盛んに用いられていた。紙芝居は子どものものと思われがちだが、戦時紙芝居の 70％は成人用だったのである。

北海道教育紙芝居協会は、北海道と樺太の紙芝居の元締的な存在で、紙芝居の取次販売、普及のための講習会、実演会、紙芝居の製作なども行っていた。戦後は児童雑誌『北の子供』が事業の軸となっていたが、紙芝居の製作・販売、貸出なども行っていた。

①『世界名作紙芝居全集』

『北の子供』に掲載の広告には、「世界名作紙芝居全集　全 10 巻を刊行」を予告している。だが実際に刊行されたのは８巻である。第３回配本予定の『三銃士』、『ドンキホーテ』、『月ものがたり』は未刊で、

代りに計画にはなかった『ジークフリート』と『家なき児』が刊行されている。

戦時に翼賛紙芝居を刊行した製作所は、敗戦後に廃業、業種を変えるなど、紙芝居を製作・販売していたのは東京の３社と札幌の新日本文化協会の４社だったという。『世界名作紙芝居全集』は、日本紙芝居協会の機関誌『紙芝居』にも取り上げられ、全国各地で上演されていた。梁川は次の８巻の紙芝居を担当している。

椿達彦・脚色

・『巌窟王』	1948年
・『ヴェニスの商人』	1948年
・『宝島』	1948年
・『フランダースの犬』	1948年
・『家なき児』	1949年

塚本長蔵・脚色

・『アラジンのランプ』	1948年
・『ウイリアム・テル』	1948年
・『ジークフリート』	1949年

ちなみに梁川が初めて手がけた紙芝居は、1943 年刊行の『北満の志士』（伊藤松雄・脚色　画劇報国社）である。

尾崎秀樹（1928～1999）は、梁川が 1937 年に『巌窟王』の口絵、挿し絵を描くのを機に、「ゲルマン系やラテン系、アングロ系各種の人種の特長を美学的に解明、特に一九世紀の各国のコスチュームを調べ、ルネッサンス期に始まり、ルイ、ロココなどの建築様式にも精通」(16)したという。それは『世界名作紙芝居全集』にも活かされ、造形的に優れたものである。

ところで、紙芝居は「絵が芝居する」と言われる。画面を抜くことで物語が進められる。したがって画には、脚本のもつドラマ性を活かすことが求められる。だが『世界名作紙芝居全集』の脚色は、どの作品もドラマ性に難がある。この紙芝居全集の場





シルレル作・塚本長蔵脚色『ウイリアム・テル』
（1948年/新日本文化協会）
【北海道立文学館蔵】





ウイダー作・椿達彦脚色『フランダースの犬』
（1948年/新日本文化協会）
【北海道立文学館蔵】

合は 12 枚に物語をまとめねばならず､長編は、説明文に終始しがちだからである。脚色者が、紙芝居製作に携わった経験を持ち合せなかったこともあろう。

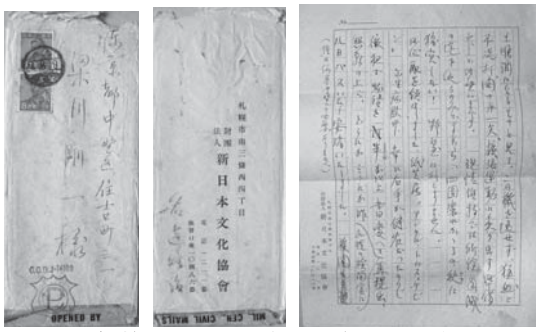
当時刊行された『教育映画・幻燈画・紙芝居目録』(文部省) は、教育映画等審査分科審議会の報告でもある。この目録に掲載された新日本文化協会の『ウイリアム・テル』の評価はＢで、「シラーの原作を脚色したものであるが、非常に要約的に扱っている」[17]と、また『アビアンナイト』の評価もＢで、「物語そのものは面白いが芝居化の技術はあまりよくない」[18]と指摘している。「紙芝居化の技術」とは何を指すのか、具体的な記述はない。だが脚色化、絵画化はもちろんのこと、紙芝居として作品化するには、両者の関係性を示唆していると思われる。

ＧＨＱの検閲は、出版物に限らずパーソナルメディアにも及んだ。手紙や電話を検閲し、占領政策に必要な情報を収集していたのである。

新日本文化協会の編集者・名達修治が東京の梁川に宛てた手紙が、郵便検閲で開封されていた。1949 年８月９日付の手紙だが、開封された部分には“OPENED BY MIL. CEN. - CIVIL MAILS”（郵便検閲による開封）と印刷されたセロテープが貼られ、その上にはパス印（Censor Pass Stamp）が捺されている。手紙の内容は、紙芝居に関する次のようなものである。

> 「アンクル・トムス・ケビン」を「徹夜で物語りを半ば以上書変へて札幌の検閲官に再提出、懇願の上で、どうにかこうにか昨八日パスいたし安堵いたしました。(絵は何等書替への必要ありません)紙芝居の第三回配本は“月ものがたり”“ドンキホーテー”の敗退で総崩れかと憂慮したが辛ふじて一歩を踏みとどめた有様です。」

懇願の上、検閲にパスしたという「アンクル・トムス・ケビン」は、なぜか刊行されていない。敗退の理由は書かれていないが、文面から推して検閲で違反に問われたとも考えられる。



郵便検閲で開封された手紙（1949年）
【個人蔵】

②誌上紙芝居「ジークフリート」

『北の子供』1949 年５月号に、誌上紙芝居「ジークフリート」（12 場面）が掲載されている。これは紙芝居『ジークフリート』（1949 年）の 12 枚の画は同じで、文は要約されている。おそらく紙芝居として刊行する前に、誌上紙芝居として『北の子供』に掲載したと思われる。



誌上紙芝居「ジークフリート」
（『北の子供』1949年5月号）
【個人蔵】

他に梁川が作成した「付録『北の子供』の栞・時間表」がある。当時の付録は、ささやかなものであった。だが梁川が描いた

色刷りの栞・時間表は、子どもたちを喜ばせたに違いない。



付録『北の子供』の栞・時間表（1948年1月号）
【個人蔵】

Ⅲ　図書の装幀、口絵、挿し絵

（1）エルム社

①「リンカーン物語」

『荒野の風雲児』［上巻］（1947 年）と『自由の夜明け』［下巻］（1948 年）は、池田宣政（1893～1980）によるリンカーンの伝記である。しかし表紙、奥付にも「リンカーン物語」の表示はなく、「はじめのことば」で「リンカーン物語」だとわかる。また『荒野の風雲児』の扉には、「リンカーン（幼き日より青年時代）」、『自由の夜明け』の扉には「リンカーン（壮年時代より晩年まで）」と表示されていて、上巻と下巻であることもわかった。こうした本づくりに、エルム社が素人の集まりであったことが垣間見える。（［　］内の上巻、下巻は筆者の補足である。）

戦後刊行のリンカーン物語は、エルム社を含めて３種刊行されている。1946 年刊行の世界社の『リンカーン物語』、エルム社





『荒野の風雲児』［上］（1947年）　『自由の夜明け』［下］【個人蔵】（1948年）

が 1947 年に刊行の『荒野の風雲児』と 1948 年刊行の『自由の夜明け』、むさし書房が 1949 年に刊行の『リンカーン　愛と正義の偉人』上巻、下巻である。この３種の関連性にも言及しておきたい。

池田宣政の『リンカーン物語』（大日本雄弁会講談社）は、1930 年が初版で「少年時代」「青年時代」「壮年時代」「大統領時代」で構成（333 頁）されている。以後 1941 年まで重版が出ている。

戦後は世界社が、1946年に池田宣政の『リンカーン物語』を刊行し、1948年まで毎年、重版している。世界社版は、大日本雄弁会講談社の初版と全く同じ内容、挿し絵（田中良）も頁数も変わらない。したがって、同じ紙型を使っての刊行と推測する。

むさし書房版は、『リンカーン　愛と正義の偉人』上巻、下巻で、1949 年の刊行である。この本はエルム社版の『荒野の風雲児』（1947 年）、『自由の夜明け』（1948 年）と同じ内容だが、挿し絵（石津博典）が異なる。エルム社版とむさし書房版は、講談社版を再構成したものと推測する。新たに加筆された部分もあるが、例えば講談社版の小見出しは「母の死」で、エルム社版とむさし書房版は「悲しきわかれ」に変えている。しかし内容・文は全く同じである。

３種の「リンカーン物語」の挿し絵、口

絵では、梁川が描いたエルム社のものが印象に残る。彼は1937年に油彩で描いた『リンカーン』の絵本を講談社から出版している。そうして経験を活かして描かれたと思われる。

むさし書房版はエルム社版の翌年に刊行されている。同じ内容の児童書が、異なる題名で異なる出版社から刊行されていることがわかった。紙型が売買されたと推測するが、戦後初期の出版版事情を垣間見ることができる。

②『笑ふ昔噺』

塚本長蔵の『笑ふ昔噺』は児童書である。「はしがき」には、日本昔話の中から「笑うお話」を拾い集めたことと、笑う話を読み、明るい心になり明るい日本をつくることに力を入れてほしいということを述べている。「どちらも楽」「くせくらべ」「だまされ狐」「かんちがい」など18話が収録されている。

『笑ふ昔噺』の特徴をよく捉えた装幀、扉、挿し絵、頁のレイアウトからは、梁川自身が楽しんで制作したことが伝わる。装幀、扉、挿し絵、どれも読者を愉しませる本づくりがうれしい。





塚本長蔵著『笑ふ昔噺』(1946年)の表紙と扉
【北海道立文学館蔵】





『笑ふ昔噺』の挿し絵
【北海道立文学館蔵】

(2) 札幌講談社

大日本雄弁会講談社が札幌出張所を開設したのは1945年5月13日で、疎開出版社のなかで一番早い疎開であった。1946年後半に札幌講談社、1948年に北海道支社、そして1964年に札幌支社となっている。

出版ブーム時に刊行した図書は、本社企画の札幌版と、札幌講談社企画に類別できる。児童書では、本社企画は「世界名作物語」や「名作物語」、漫画など。札幌企画では「太郎の自然研究」「私たちの研究」など科学読み物シリーズである。

装幀と扉など

①児童書『クモの生活』

『クモの生活』(常木勝次)は札幌講談社の企画で、1947年に「太郎の自然研究」として、1948には「私たちの研究」シリーズとして刊行された。装幀はいずれも梁川の筆になるが、掲載のように全く異っている。1947年版の装幀は、地色はモスグリーンで、植物を図案化した縁取りは赤茶色である。扉絵は水色と茶で壺にいけた花を描いている。いずれも落ち着いた雰囲気である。

1948年版の『クモの生活』は、「私たちの研究」シリーズの1冊として刊行されている。内容は同じだが、新たな装幀で刊行されている。上製厚用紙の特長を活かし、

地色は水色と黄緑のグラデーション、口絵にクモの写真を使い、下部には帯状に図案を施している。梁川は『クモの生活』で、２種類の装幀を手がけたことになる。





『クモの生活』（1947年/札幌講談社）
【個人蔵】





『クモの生活』
（1948年/札幌講談社）
『田熊常吉の苦心』
（1947年/札幌講談社）
【個人蔵】

『田熊常吉の苦心』（澤田謙　1947年）は「タグマ式汽罐」を発明した田熊常吉の伝記である。装幀は黒ずんだ緑に水玉模様の地に、題字部分は赤味を帯びたオレンジ、その下は黄色である。色彩の組み合わせが印象的な装幀である。

②ユーモア小説『恋愛復員』

梁川は児童書だけでなく、小説の装幀、扉絵も手がけている。『恋愛復員』は小説家・大平陽介の著作。表紙に描かれた５人の若い男性は学徒動員で出征し、無事復員した大学の同窓生。女性は大学時代の恩師の令嬢。物語は令嬢をめぐる恋のさやあてのユーモア小説である。梁川の装幀と扉絵は、物語を象徴するような雰囲気を醸し出していておもしろい。





大平陽介著『恋愛復員』（1947年/札幌講談社）
【北海道立文学館蔵】

（3）新日本文化協会

児童雑誌『北の子供』を発行していた新日本文化協会は、女流作家叢書や児童書も刊行していた。

装幀と口絵

①児童書『密林王』

1948年に刊行された児童書は、南洋一郎（池田宣政）の『密林王』『魔海の黄金島』『魔海の大秘境』、寺島柾夫の『怪人島』の４点で、装幀、口絵はいずれも梁川の筆である。





南洋一郎著『密林王』（1948年）
【プランゲ文庫蔵】

当時、印刷用紙は配給制で、割当がない場合は仙花紙が使われることが多く、色刷

の効果も十分には出ない制約があった。猛獣狩冒険譚『密林王』にも、裏面が透けて見えるような仙花紙が使われている。だが梁川が描いた密林の動物たちは精緻で迫力があり、モノクロだが物語の世界に引き込む力をもっている。

②『ナツノエホン』

『ナツノエホン』は、1946年８月に発行されたと思われるが、刊行本は確認できていない。だが市立函館博物館にゲラ刷が所蔵されていた。夏のあそび、風景などを描いたものでＢ５判（横綴）６頁の絵本である。近刊予告には、「梁川剛一画伯」の『アキノエホン』も宣伝されているが、この絵本は刊行されなかったようだ。



梁川剛一絵ト文『ナツノエホン』（1946年/ゲラ刷）
【市立函館博物館蔵】

③女流作家叢書『奔流』と『海風』

新日本文化協会は、「女流作家叢書」を企画・刊行していた。実際には窪川（佐太）稲子の『くれなゐ』、大庭さち子の『奔流』、壺井栄の『海風』の３点で終わっている。

装幀

大庭さち子の『奔流』、壺井栄の『海風』は梁川の装幀である。『奔流』には新旧２作品が収録されている。「奔流」は出稽古専門のピアノ教師の話である。表紙は経年劣化で見えにくいが、ピアニストの顔と指先はシルエットで、流れる渦のような線上に踊る音符から、彼女の奏でる音が聴こえてくるようで印象的な装幀である。

『海風』には、「夕やけ」「海風」の短編２作品が収録されている。海風を受ける女性の、凛とした佇まいが目をひく。



大庭さち子著『奔流』
（1946年）



壺井栄著『海風』
（1946年）

【北海道立文学館蔵】

（3）北海道出版社

高垣眸（1898～1983）は、児童向の時代小説家として活躍した。代表作は「快傑黒頭巾」である。勝尾金弥（1927～）によると『九曜星』は、中国大陸を舞台にした時代小説で、1939年４月～40年３月まで『少女倶楽部』に連載された後、『大陸の若鷲』と改題して大日本雄弁会講談社から刊行されたという。(19)

戦後は、1948 年５月に北海道出版社が『九曜星』を刊行し、翌1949年２月にはポプラ社が刊行している。同じ本が１年を経ずして異なる出版社から刊行されていた。紙型の売買によるものであろうか。

装幀、口絵

装幀と口絵は梁川の筆である。札幌時代に手がけた児童書の装幀では、時代小説は『九曜星』だけである。主人公の弟妹、下部には主要な登場人物を配した装幀は、オレンジの地色によく映える。弟妹は明国の将軍に出世した兄を尋ね、さまざまな困難を克服して対面する冒険小説である。口絵の下段には、どのような場面を描いたかが要約され頁数も表記されていて、読者を物

語へ誘う役割を果たしている。





『九曜星』表紙絵と口絵(1948年)
【プランゲ文庫蔵】

(4) 北海道庁刊『北海道の新しい姿』

北海道庁編の小冊子『北海道の新しい姿』は、「北海道を十分に知ってもらうため」に編纂されたという。収録原稿は公募で当選の１等「新しい北海道」、２等「最近の北海道」「再建のホープ北海道」の３篇が収録されている。梁川が担当しているのは扉絵、口絵、挿し絵である。

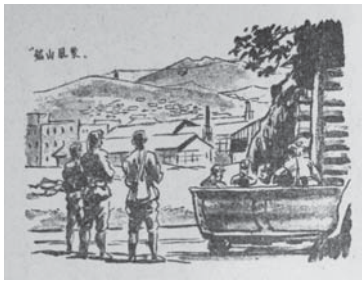
口絵と挿し絵

梁川が描いた挿し絵は 12 点だが、うち６点を掲載した。Ｂ６判の小さな冊子なので挿し絵も小さい。だが開墾、生活を支える農漁業、林業、鉱業など、挿し絵からも当時の北海道を知ることができる。梁川は各地を歩いた折に、スケッチしたのであろう。


口絵「道庁」


挿し絵「開墾風景」


挿し絵
「鰊漁」


挿し絵
「鉱山 風景」


挿し絵
「冬の造材風景」


挿し絵
「ストーブのある冬の部屋」

【北海道立文学館蔵】

(5) ファッション洋裁学院出版部

『最新子供服講座』は、1949 年 12 月の出版。著者は札幌のファッション洋裁学院長の宮島初子で、装幀と口絵は梁川である。梁川は、この学院の委嘱でスタイル画のデッサンを指導していたと語っている。(20)

「著者の言葉」によると、洋裁独習者の案内書や学校のテキストとして編まれたという。当時、洋裁は若い女性に人気があり、婦人雑誌にはファッションや洋裁記事などが掲載されていた。

口絵は「毛糸編」「コート」「パジャマ」

など数頁にわたる。子どもを年齢ごとに描き分け、モダンなレイアウトで見る人を惹きつける。



『最新子供服講座』表紙と口絵「毛糸編」


口絵「コート」(1949年)
【北海道立図書館蔵】

(6) 東亜育種株式会社



『東亜種苗目録　昭和二十四年』(1949年)
【北海道立文学館蔵】

『東亜種苗目録　昭和二十四年』の表紙絵は、梁川が描いている。この目録の頁を繰っていると、「札幌」の名を冠した野菜―「札幌太人参」「札幌大長白牛蒡」「改良札幌第封甘藍」（キャベツ）などが生産されていたことや、近年話題になっている玉ねぎ「札幌黄」が、66年前には主な品種だったことを知って興味深かった。

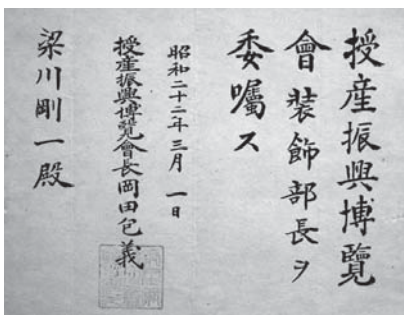
5　その他の文化活動

(1) 美術活動

全国授産振興博覧会は、1947年８月５日から９月10日まで開催された。産業振興を目的に開催されたもので、会場では全国の授産所、職業補導所の製品が展示されたという。

梁川は、この博覧会の装飾部長に依嘱され、第１会場の大通公園８丁目の会場全体と正門アーチの設計を担当した。彫刻家としての力量を発揮できた仕事だったようだ。「アーチは風が強いので高さ三メートルまでの制限があったが、その制限ギリギリに放物線を使った変った設計」にした。「写真も何も残ってないけれど、あれは今思い出してもうれしい仕事だった」(21)と語っている。その写真を見つけたので掲載しておきたい。写真は『全授博一週(ママ)年記念開道八十年記念北海道産業誌』（全国授産振興博覧会事務局　1948年）に収録されていたものである。

また梁川によると「応用美術協会」を設立し、「展覧会を開いたり繁華街にアーケードを計画設計」し、「市電の車体の色彩統一の相談に乗った」(22)と商業デザインでも活躍したと語っている。



委嘱状【個人蔵】



全国授産振興博覧会正門アーチ
【北海道立図書館蔵】

(2) 文化団体理事

前述した児童雑誌『北の子供』（1946 年４月～1950 年１月）、『世界名作紙芝居全集』（1947～1948 年）などを出版していたのは財団法人新日本文化協会（1945 年 12 月設立）である。梁川は発足当時から理事を務め、『北の子供』の表紙絵や紙芝居、「女流作家叢書」の装幀などで貢献した。

また財団法人北海道科学普及協会（1946 年３月設立）の評議員であった。この協会は科学教育普及をめざして活動を展開していたが、科学雑誌『新生科学』（1946 年７月創刊）、児童誌『私たちの科学』（1948 年６月創刊）を発行していた。

(3) 講演活動

梁川は北海道庁の委嘱をうけて、道内各地で講演活動を行ったと語っている。資料がなく講演のテーマはわからないが、おそらく文化・芸術に関する講演だったと思われる。こうした講演活動で道内各地を訪れた際に、農漁村、山村、炭鉱などをスケッチしたのであろう。そうした成果が雑誌の表紙や挿し絵に結実したと思われる。

おわりに

梁川にとって、札幌は「第二の故郷」だという。多感な中学生時代、そして敗戦後で、誰もが生活するのに精いっぱいだった時期を札幌で活躍したからであろう。

戦後は出版関係者に出会い、出版物の表紙絵、装幀、挿し絵などの制作に携わり、多くの作品を残した。稿末表２は、現時点で探し出せた札幌時代の梁川の作品をまとめたものである。

これまで探索した作品について、感じ考えたことを記したい。札幌時代の梁川は、雑誌、図書、商業用冊子、全授博、商業美術など多様な仕事に取り組んでいた。梁川はどのような制作依頼にも真摯に向き合い、よりよい作品を生み出す努力を惜しまなかった。そして新たな地での仕事に発見があり、何より楽しんで制作していたのではないだろうか。次の３点に、そうした梁川の姿勢を見ることができよう。

一つは、梁川が彫刻家、挿し絵画家として培ってきたことが、札幌時代の仕事を支えていたことは確かである。だが当時は画材も、印刷用紙も容易に入手できず、印刷技術は未熟なものであった。そうした制約の多いなかで、よりよい表現を求めて工夫、努力を惜しまなかったことが札幌時代の作品に表われていると思う。

二つに、梁川自身が述べているように、依頼者の意図を理解し、表現することに力を注いでいることである。おそらく依頼者が発行する雑誌や図書などにも目を通し、内容や時代背景を把握した上で作品制作に向き合っていたのではないだろうか。

三つには、梁川は北海道各地に赴き、四季を通じて北海道の自然の美しさ、厳しさをあらためて知ったようだ。そうした経験を通して戦後の農山漁村や都会に暮す人々、働く人々に目を向け、自身が感じ考えたこと絵に表現していることである。

梁川の札幌時代の足跡を辿ってきたが、まだ発見できない作品もあるかも知れない。また本稿で十分に意を尽くせなかった部分

は、今後の課題としたい。

（日本児童文学学会北海道支部）

---

(1)「終戦直後の日配と出版界」『資料年表 日配時代史』 出版ニュース社 57頁。
(2)「私の挿画論」『梁川剛一挿画大集』 講談社 106頁。
(3)「北海青年の發足に當つて」『北海青年』1947年5月号の編集後記 裏表紙。
(4)「日本教養組合聯盟」の広告と「編輯室から」『青年時代』1946年4月号 裏表紙。
(5)「女子として全国大会に臨みて」『北海青年』1947年8月号 10頁。
(6) 著者は松浪辰次郎。ゲラ刷の4～6頁の違反箇所には、検閲によるバツ印とSuppressの書き込みがある。
(7)『朝日新聞出版局史』 朝日新聞社 1969年 252-253頁。
(8) 前掲書(7) 248頁。
(9) 谷暎子「吉田一穂の『楡の誓』と『楡』」『北海道文学館報』61号 2005年4月20日 北海道立文学館。
(10)「戦後北海道の児童文化に携わった人々(2) 小山内龍の大野村」『ヘカッチ』第5号（北海道子どもの文化研究同人「ヘカッチ」の会, 2000年）。
(11)「北海道の女性と美」『週刊朝日』北海道版 1946年12月22・29日合併号 22頁。
(12)『週刊朝日』北海道版の1946年10月20日号に掲載されている。なお「北海道版」と表記されているのは1947年1月5日号からで、それ以前は表示されていない。
(13) 原田三夫「児童の科学教養…「子供の國」由来記…」『ばとん』1947年9月号 45頁。
(14)「造形六十年」『私の中の歴史』6 北海道新聞社 1986年 150頁
(15) 吉崎元章「挿し絵の中の彫刻家の眼」『梁川剛一さしえ展―図録―』 芸術の森美術館 1991年 9頁。
(16) 尾崎秀樹「梁川剛一」『日本児童文学大事典』第2巻 大日本図書 1993年 239頁。
(17)『教育映画・幻灯画・紙芝居目録』第一集 文部省 125頁。
(18) 前掲書(17) 119頁。
(19) 勝尾金弥「高垣眸」『日本児童文学大事典』第1巻 大日本図書 1993年。
(20) 前掲書(14) 151頁。
(21) (20)に同じ。
(22) 前掲書(14) 150頁。

参考文献

全国授産振興博覧会事務局編『全授博一週(ママ)年記念開道八十年記念　北海道産業誌』，全国授産振興博覧会事務局，1948 年。

梁川剛一『梁川剛一挿画大集』 講談社，1975年

にれの樹の会編『北海道の児童文学』，北海道新聞社，1979 年。

札幌市教育委員会文化資料室編『札幌の彫刻』，北海道新聞社，1982 年。

尾崎秀樹「児童文化のパイオニアたち③　梁川剛一氏に聞く」『飛ぶ教室：児童文学の冒険』第 3 号，光村図書，1982 年

尾崎秀樹『夢をつむぐ－大衆児童文化のパイオニア』，光村図書，1986 年

北海道新聞社編『私のなかの歴史』6，北海道新聞社，1986 年

尾崎秀樹『さしえの 50 年』 平凡社，1987 年

芸術の森美術館編『梁川剛一さしえ展図録』，芸術の森美術館，1991 年

石附忠平教育評論集刊行委員会編『石附忠平教育評論』，北海道教育評論社，1991 年

谷暎子「児童文芸雑誌『北の子供』解題(一)と細目」『北星学園女子短期大学紀要』27，北星学園大学，1990 年

谷暎子「児童文芸雑誌『北の子供』解題(二)」『北星学園女子短期大学紀要』28，北星学園大学，1992 年

谷暎子「戦後復興期に児童文化活動に携わった人々その 1　梁川剛一」『へカッチ』1，北海道子どもの文化研究同人「へカッチ」の会，1994 年

市立函館博物館編『梁川剛一資料目録』，市立函館博物館，1996 年

谷暎子「戦後まもなくの札幌の児童文化 昭和 20 年～25 年」『札幌の歴史』33，札幌市教育委員会文化資料室，1997 年

谷暎子「科学新聞『子供の国』－財団法人・子供の国の児童文化活動」『へカッチ』4，北海道子どもの文化研究同人「へカッチ」の会，1999 年

芸術の森美術館編『中根邸の画家たち』，芸術の森美術館，2000 年

岡崎武志『古本病のかかり方』，東京書籍，2000 年

平澤和秀「札幌講談社と出版物」『譚』3，二水会，2000 年

平澤和秀「本道出版ブームと地元系出版社の活動　札幌篇（三）」『譚』7，二水会，2001 年。

平澤和秀「本道出版ブームと地元系出版社の活動　札幌篇（四）」『譚』8，二水会，2001 年。

平澤和秀「本道出版ブームと地元系出版社の活動　札幌篇（五）」『譚』9，二水会，2002 年。

谷暎子「『週刊朝日』－北海道版－を辿って」『波灯』19，留萌市文化団体協議会，2006年。

谷暎子「「こども朝日」北海道版をたどって」『波灯』20，留萌市文化団体協議会，2007 年。

柴村紀代「梁川剛一の北海道版絵本について」『藤女子大学紀要 第 II 部』47，藤女子大学，2010 年。

資料　梁川剛一・札幌時代の出版物にみる作品リスト

1　雑誌の表紙、絵物語など

雑誌名	種類	掲載年月	巻号	題名	出版社
北の子供 （児童雑誌）	表紙	1947(昭和22) 7 月号	2 巻 4 号	舟	新日本文化協会
		1947(昭和22) 8 月号	2 巻 5 号	山上の征服	新日本文化協会
		1947(昭和22) 9 月号	2 巻 6 号	釣の名人	新日本文化協会
		1947(昭和22)10月号	2 巻 7 号	葡萄とり	新日本文化協会
		1947(昭和22)11月号	2 巻 8 号	僕たちも一人前	新日本文化協会
		1947(昭和22)12月号	2 巻 9 号	クリスマス	新日本文化協会
		1948(昭和23) 1 月号	3 巻 1 号	はねつき	新日本文化協会
		1948(昭和23) 2 月号	3 巻 2 号	得意とするわざ	新日本文化協会
		1948(昭和23) 3 月号	3 巻 3 号	お止しなさいよ	新日本文化協会
		1948(昭和23) 4 月号	3 巻 4 号	新入学	新日本文化協会
		1948(昭和23) 5 月号	3 巻 5 号	こいのぼり	新日本文化協会
		1948(昭和23) 6 月号	3 巻 6 号	炊事遠足	新日本文化協会
		1948(昭和23) 7 月号	3 巻 7 号	ボート漕ぎ	新日本文化協会
		1948(昭和23) 8 月号	3 巻 8 号	海水浴	新日本文化協会
		1948(昭和23) 9 月号	3 巻 9 号	なし	新日本文化協会
		1948(昭和23)10月号	3 巻10号	なし	新日本文化協会
		1948(昭和23)11月号	3 巻11号	なし	新日本文化協会
		1948(昭和23)12月号	3 巻12号	なし	新日本文化協会
		1949(昭和24) 1 月号	4 巻 1 号	なし	新日本文化協会
		1949(昭和24) 2 月号	4 巻 2 号	なし	新日本文化協会
		1949(昭和24) 3 月号	4 巻 3 号	なし	新日本文化協会
		1949(昭和24) 4 月号	4 巻 4 号	なし	新日本文化協会
		1949(昭和24) 5 月号	4 巻 5 号	サクラ咲く頃	新日本文化協会
		1949(昭和24) 6 月号	4 巻 6 号	時の記念日	新日本文化協会
		1949(昭和24) 7 月号	4 巻 7 号	風薫る水辺	新日本文化協会
		1949(昭和24)8･9月号	4 巻8･9号	海風を浴びて	新日本文化協会
		1949(昭和24)10月号	4 巻10号	優勝を期して	新日本文化協会
		1949(昭和24)11月号	4 巻11号	収穫	新日本文化協会
		1949(昭和24)12月号	4 巻12号	雪ふりそめて	新日本文化協会
		1950(昭和25) 1 月号	5 巻 1 号	明けゆく元朝	新日本文化協会
	絵物語	1948(昭和23) 9 月号	3 巻 9 号	「金の鳥」 ※和田徹三　文	新日本文化協会
		1948(昭和23)10月号	3 巻10号	「イワンの馬鹿」 ※和田徹三　文、久我恭介（梁川剛一）絵	新日本文化協会
		1948(昭和23)11月号	3 巻11号	「愛の学校」 ※和田徹三　文	新日本文化協会
		1948(昭和23)12月号	3 巻12号	「家なき児」 ※和田徹三　文	新日本文化協会
		1949(昭和24) 1 月号	4 巻 1 号	「ハックルベリー物語」 ※和田徹三　文	新日本文化協会
		1949(昭和24) 4 月号	4 巻 5 号	「ガラスの小沓」 ※和田義雄　文	新日本文化協会
		1949(昭和24)10月号	4 巻10号	「岩窟王」(1) ※椿達彦　文	新日本文化協会
		1949(昭和24)11月号	4 巻11号	「岩窟王」(2) ※椿達彦　文	新日本文化協会
		1949(昭和24)12月号	4 巻12号	「岩窟王」(3) ※椿達彦　文	新日本文化協会
		1950(昭和25) 1 月号	5 巻 1 号	「鉄仮面」(1)	新日本文化協会
	挿絵	1949(昭和24) 3 月号	4 巻 3 号	3月生まれの偉人 「ミケランジェロ」	新日本文化協会
		1949(昭和24) 4 月号	4 巻 4 号	「風車小屋物語」 ※後藤庸也　文	新日本文化協会
	誌上紙芝居	1949(昭和24) 5 月号	4 巻 5 号	誌上紙芝居 「ジークフリート」	新日本文化協会
	附録	1948(昭和23) 1 月号	3 巻 1 号	北の子供の栞･時間表	新日本文化協会
中学生 （学習雑誌）	表紙	1948(昭和23)創刊号	1 巻 1 号		北海道教育図書出版
青年時代 （青年雑誌）	表紙	1947(昭和22) 1 月号	2 巻 1 号		桜菊書院北海道支部
		1947(昭和22)2･3月合併号	2 巻 2 号		桜菊書院北海道支部

雑誌名	種類	掲載年月	巻号	題名	出版社
北海青年 ※青年時代の改題	表紙	1947(昭和22)４月号	２巻４号		北海青年社
		1947(昭和22)５月号	２巻５号		北海青年社
		1947(昭和22)６月号	２巻６号		北海青年社
		1947(昭和22)７月号	２巻７号		北海青年社
		1947(昭和22)９月号	２巻８号		北海青年社
		1947(昭和22)10月号	２巻９号		北海青年社
		1947(昭和22)12月号	２巻11号		北海青年社
海 （漁村雑誌）	表紙	1947(昭和22)２月15日	１巻１号		北海道漁村文化協会
		1947(昭和22)４月	１巻２号		北海道漁村文化協会
		1947(昭和22)８月	１巻３号		北海道漁村文化協会
		1947(昭和22)10月	１巻４号		北海道漁村文化協会
		1947(昭和22)12月	１巻５号		北海道漁村文化協会
		1948(昭和23)１月	２巻１号	初漁	北海道漁村文化協会
		1948(昭和23)４月	２巻２号		北海道漁村文化協会
		1948(昭和23)８月	２巻３号		北海道漁村文化協会
		1949(昭和24)１月	３号１号		北海道漁村文化協会
	挿絵	1947(昭和22)２月－ 1949(昭和24)８月	創刊号－ ３巻１号	連載小説「朔風」(1－8) ※新田順 著	北海道漁村文化協会
		1947(昭和22)４月	１巻２号	読者文芸	北海道漁村文化協会
	絵と文	1947(昭和22)10月	１巻４号	抜海の繪に題する	北海道漁村文化協会
		1947(昭和22)12月	１巻５号	漁村の防寒建築に対する一考 漁村所見	北海道漁村文化協会
	ポスター	1947(昭和22)	—		北海道漁村文化協会
週刊朝日 **―北海道版** （週刊誌）	週刊誌表紙	1946(昭和21) 11月24日･12月１日合併号	49巻22･23号		朝日新聞社
		1946(昭和21) ２月22･29日合併号	49巻26･27号		朝日新聞社
	絵と文	1946(昭和21) 12月22･29日合併号	49巻26･27号	北海道の女性と美	朝日新聞社
こども朝日 **―北海道版**	挿絵	1946(昭和22)１月15日号	７巻２号	雪の上の動物の足跡	朝日新聞社
北海道新聞	絵と文	1949(昭和24)２月17日号		カップルは美しく	北海道新聞社
ぱとん （家庭雑誌）	文	1947(昭和22)7･8月号	２巻５号	婦人と彫刻	子供の国
健民	文	1946(昭和21)１月号	12巻１号	新日本のルネッサンス	北東日本厚生協会
		1946(昭和21)５月号	12巻５号	彫刻談義	北東日本厚生協会
東亜種苗	カタログ表紙	1949(昭和24)			東亜種苗



『ピノチオ』
(1947年)
【市立函館博物館所蔵】



『絵本イソップ』
(1946年)
【北海道立文学館所蔵】



『絵本アラビヤンナイト』
(1946年)
【北海道立文学館所蔵】

2　絵本と紙芝居

	タイトル	シリーズ名	掲載年	文	出版社
絵本	土の唄	コドモエホン	1946(昭和21)	野村秀雄	エルム社
	絵本イソップ		1946(昭和21)	塚本長蔵	エルム社
	みどり児の歌	コドモエホン	1946(昭和21)	板谷節子	エルム社
	アリババと四十人の盗賊	絵本アラビヤンナイト	1946(昭和21)	塚本長蔵	エルム社
	シンドバットの冒険	絵本アラビヤンナイト	1947(昭和22)	塚本長蔵	エルム社
	アラジンのランプ	絵本アラビヤンナイト	1947(昭和22)	塚本長蔵	エルム社
	コビトノクニ	コドモエホン	1947(昭和22)	塚本長蔵	エルム社
	ピノチオ	コドモエホン	1947(昭和22)	塚本長蔵	エルム社
	おいうえ王のかぎ	コドモエホン	1948(昭和23)	梁川剛一	エルム社
	のりもの	はやがわりエホン	1948(昭和23)	梁川剛一	エルム社
	不屈魂	絵本よみもの	1946(昭和21)	塚本長蔵	エルム社
	この努力この栄冠	絵本よみもの	1947(昭和22)	塚本長蔵	エルム社
	コーカサスのほりょ	絵本よみもの	1947(昭和22)	塚本長蔵	エルム社
	白ゆり紅ばら	絵本よみもの	1947(昭和22)	塚本長蔵	エルム社
	ぼくらの放送局	絵本よみもの	1947(昭和22)	塚本長蔵	エルム社
	寶くらべ	絵本よみもの	1948(昭和23)	塚本長蔵	エルム社
	犬物語	絵本よみもの	1948(昭和23)	塚本長蔵	エルム社
	サンタクロース		1946(昭和21)	梁川剛一	エルム社
	巌窟王	青少年世界名作絵読本 Vol. 1	1947(昭和22)	椿達彦	北海道出版社
	鐵假面	青少年世界名作絵読本 Vol. 2	1948(昭和23)	椿達彦	北海道出版社
	ナツノエホン		不明	梁川剛一	新日本文化協会
紙芝居	巌窟王	世界名作紙芝居全集	1948(昭和23)	椿達彦	新日本文化協会
	ヴェニスの商人	世界名作紙芝居全集　3	1948(昭和23)	椿達彦	新日本文化協会
	寶島	世界名作紙芝居全集　4	1948(昭和23)	椿達彦	新日本文化協会
	ウイリアム・テル	世界名作紙芝居全集　5	1948(昭和23)	塚本長蔵	新日本文化協会
	アラジンのランプ	世界名作紙芝居全集	1948(昭和23)	塚本長蔵	新日本文化協会
	フランダースの犬	世界名作紙芝居全集	1948(昭和23)	椿達彦	新日本文化協会
	家なき児	世界名作紙芝居全集	1949(昭和24)	椿達彦	新日本文化協会
	ジークフリート	世界名作紙芝居全集	1949(昭和24)	塚本長蔵	新日本文化協会

3　装幀、口絵、挿し絵など

	種類	単行本題名	著者名		出版社	出版年
児童書	装幀	荒野の風雲児	池田宣政	リンカーン伝記　上	エルム社	1947
	扉、口絵、挿絵	荒野の風雲児				1947
	装幀	自由の夜明け	池田宣政	リンカーン伝記　下	エルム社	1948
	扉、口絵、挿絵	自由の夜明け				1948
	装幀	笑ふ昔噺	塚本長蔵		エルム社	1946
	扉、挿絵	笑ふ昔噺				1946
	装幀	怪人島	寺島柾夫		新日本文化協会	1948
	口絵、挿絵	怪人島				1948
	装幀	密林王	南洋一郎		新日本文化協会	1948
	口絵、挿絵	密林王				1948
	装幀	魔海の黄金島	南洋一郎		新日本文化協会	1948
	口絵、挿絵	魔海の黄金島				1948
	装幀	魔海の大秘境	南洋一郎		新日本文化協会	1948
	口絵、挿絵	魔海の大秘境				1948
	装幀	田熊常吉の苦心	澤田謙		札幌講談社	1948
	装幀	クモの生活	常木勝次	太郎の自由研究	札幌講談社	1947
	扉	クモの生活				1947
	装幀	九曜星	高垣眸		北海道出版社	1948
	口絵、挿絵	九曜星				1948
一般書	装幀	奔流	大庭さち子	女流作家シリーズ	新日本文化協会	1946
	装幀	海風	壺井栄	女流作家シリーズ	新日本文化協会	1946
	装幀	恋愛復員	大平陽平		札幌講談社	1947
	扉、口絵、挿絵	北海道の新しい姿		北海道庁編	北海道庁行政調査室	1948
	装幀、口絵	最新子供服講座	宮島初子		ファッション洋裁学院出版部	1949
素描	スケッチ	摩周湖見晴台	梁川剛一		市立函館博物館蔵	1946
	スケッチ	（江別）火力工場	梁川剛一		市立函館博物館蔵	1947

〈資料紹介〉

梁川剛一資料の収集経過とその周辺

奥野　進

１　市立函館博物館所蔵の梁川剛一資料

梁川剛一については知らなくとも、その作品は絵本や児童雑誌を通じて目にしていることが多いのではないだろうか。また、函館市民にとっては、郷土が誇る彫刻家・挿絵画家で、まちのなかに聳(そび)える高田屋嘉兵衛像や明治天皇御上陸記念碑（鳳凰）などの作品は、市民には馴染み深い存在となっている。

彫刻作品は写実的で、確かな観察眼に基づく力強い立体感が特徴的で、彫刻家ならではの陰影を駆使した躍動感溢れる挿絵は、作家の意図を忠実に表現して読者に届けることでも定評がある。

詳しい梁川剛一の評価や人物像は、他を参照していただくとし(1)、ここでは参考までに略年譜を巻末に掲載した(2)。

当館では、1989 年（平成元）に梁川剛一氏の長女斎藤ルリ子氏、次女梁川美恵子氏から資料の寄贈・寄託を受けて以来、追加で資料の寄贈を受けるなど、「梁川剛一資料」は一大コレクションを形成している。

寄贈された遺品や作品は、継続して調査を続け、没後 10 年となる 1996 年（平成８）には、寄贈・寄託資料を整理して、彫刻（51 件）、挿絵（1,176 件）、素描・スケッチ（79 件）、下絵（161 件）、遺品（188 件）、図書（953 件）、資料件数 2,608 件の資料をまとめて『梁川剛一資料目録』を刊行した。

展示等による資料公開については、1993 年（平成５）、新設された函館市文学館に常設の梁川剛一コーナーを設置するとともに、2006 年（平成 18）には、故郷函館で初めての本格的な展覧会となる特別企画展「没後 20 年　梁川剛一」展（６月 20 日～８月 20 日）を開催している。

資料の博物館への受入以来、整理・調査・保存・展示等、当館の主要コレクションの一つとして着実に歩みを刻んできたが、受入当時にかかわった方々の高齢化等により、受入当時の状況が、忘れ去られつつあることから、これまでの函館市と梁川家とのやり取り、博物館への資料の受け入れ過程等、「梁川剛一資料のこれまで」をあらためて振りかえってみたい。



『梁川剛一資料目録』

２　函館市と梁川家のやり取り

２－１　函館市への資料寄贈の動き

市立函館博物館へ資料群が寄贈・寄託されたのは1989年（平成元）だが、博物館に残された記録[3]（以下、「記録」と表記）を見ると、かなり以前から、梁川剛一氏本人とのやり取りが記録されている。

はじめの動きは、1978年（昭和53）頃だったらしく、前年（1977年）の高田屋嘉兵衛まつりの折に、「市教育部長」から話のあった作品寄贈について協議するための日程調整の葉書が残されている[4]。

実際、5月16日には、市職員が派遣され、剛一氏本人と東京のアトリエで作品寄贈に関する打合せが行われていた[5]。打合せのなかで剛一氏は、現在持っている彫塑・挿絵作品の大部分とこれから作成する作品のなかから良いものを市に寄贈する考えを伝え、北海道道南会[6]の席上、市助役に対して同様の考えの一端を話したことがあった旨を伝えていた。

同じ頃、函館市では「市立美術館」の建設を求める市民運動も高まりを見せる。函館で美術館を求める動きは、1960年（昭和35）頃に始まるが、昭和40年代後半になると、美術団体赤光社が建設資金のための募金・署名活動を展開する。1975年（昭和50）には、函館市文化会と函館市文化団体協議会による陳情書「文化センター（美術館及び青少年科学館）の建設について」も提出され、市長も建設について前向きな姿勢を見せていた。[7]

折しも、1977年（昭和52）には北海道立近代美術館が札幌に開館、程なくして1979年（昭和54）には、道都札幌以外の地に「地方美術館」の建設をすすめる道立地方美術館設置基本構想が策定されている。

このような市の美術館建設の動きについては、剛一氏も関心を持っていたようで、美術館の建設が具体化していないのであれば、「梁川記念室」のような場所に展示してもらえれば良い、寄贈の時期は函館市で検討してほしいとの意向を示していた。

作品の寄贈・継承についての剛一氏の考えの根底には、1945年（昭和20）5月の空襲で自宅・アトリエを焼失して作品を失ったことによる経験から、作品の継承を函館市に託したいとの思いもあったらしく、この協議の時点で、出版社等で保管していた作品も引き揚げて整理している最中だったという[8]。

対応した市社会教育課長の「所見」では、剛一氏の年齢、アトリエの狭隘化などを勘案し、早急に美術館における記念室構想を検討して、とりあえず彫塑は学校の空き教室に、挿絵は博物館で保管し、記念展覧会を開催するなどの具体的方策に言及していた。



焼失した自宅
（梁川美恵子氏蔵）



高田屋嘉兵衛まつりに参加した梁川剛一氏
（向かって右側、市立函館博物館蔵）

さらに、1978年（昭和53）７月23日に開かれた第３回高田屋嘉兵衛まつりに剛一氏が招待され来函した折にも、美術館建設の件や作品の寄贈点数や展示スペースの体裁などの話が出ており、手許にある資料がほとんど掲載された『梁川剛一挿画大集』（講談社　1975年）が、今後の作品選定の助けになることなどが確認されていた[9]。

その後も協議は続き、1980年（昭和55）には、市職員が剛一氏のアトリエを訪れて、美術館が道立美術館の誘致となったことに伴う道立施設への作品収蔵の可否、挿絵作品の選定依頼などがやり取りされた。収蔵場所の件は了承を得、挿絵作品については剛一氏の子どもたちが家に残してほしいと要望している作品もあるので相談しておくとして、彫塑の受入などさらに具体的な話し合いが進められていた[10]。さらに、同年５月６日には電話ではあるが、剛一氏より市長へ寄贈の申し出をしたいとの要望があったことが記録されているが、「記録」には、その後の経過は残されておらず、この一連の交渉がどのような結果になったのかは明らかではない。

後の報告[11]では、この時は剛一氏本人が、作品を「妻や子供のために手元に残して置きたい」として寄贈には至らなかったとされている。この昭和50年代の一連の動きについてあらためて美恵子氏にも確認してみたが、経過は全く知らないとのことだった。

次に、梁川家と資料に関するやり取りが残されているのが、美恵子氏から市担当者への手紙[12]となる。この手紙によると、剛一氏死去後、1987年（昭和62）頃に、折原久左ヱ門氏[13]から、北海道立美術館への作品寄贈のすすめがあったようで、具体的ではないが、「父の作品を永久に置いていただく事は大変喜こばしい事でもあり、又当然の事である様な気がいたします。それは、父の生れ育った古郷でもあり、函館に対する郷土愛が非常に強い人だったので、きっと父も喜こんで満足する事だろうと思います。」として、「いづれその時期が来ましたら、……（中略）……はっきりと決めていきたい」と回答していた。

折原氏によると、寄贈を勧めた経緯について、当時のことをあまり憶えてはいないが、梁川剛一氏の作品を道立の美術館に収蔵する考えは、笹野尚明（たかあき）氏が強く提唱されていたとのことだった。

笹野尚明氏は、函館出身で、画家笹野順太郎氏のご子息にあたり、1987年（昭和62）当時は岩見沢市立上幌中学校に教頭として勤務されていたが、北海道立近代美術館の（1977 年設置）開設準備室に携わった後、そのまま同近代美術館、旭川美術館、札幌芸術の森美術館等を歴任されるなど美術館との関わりも深かった。

詳細はまだ調査を要するが、市の美術館建設構想が進められるなかで、当時の梁川剛一作品と故郷函館の間には、少なくとも上記のような方々が関わった「縁」があったことが垣間見える。

２－２　梁川剛一記念美術館の開設

函館市への寄贈を断った剛一氏は、1985年（昭和60）から自宅を建て直して私設美術館を設立する動きを始める。[14]

美恵子氏によれば、美術館建設の考えは、長女ルリ子氏、次女美恵子氏姉妹の強い意志によるもので、剛一氏本人は、当初は自宅を立て直して小さな美術展示室の併設を想定していた程度で、大規模な美術館建設に対しては積極的ではなかったという。美恵子氏らが「１年くらいかけて父を説得した」結果、最終的に剛一氏も賛成してくれたという。翌86年３月には記念美術館の起工式が行われるが、その直後の４月26日に完成を見ることなく、剛一氏が亡くなってしまった（享年84歳）。



自宅建て替え直前の梁川剛一氏
自宅アトリエにて（梁川美恵子氏蔵）



斎藤ルリ子氏（左）・梁川美恵子氏（右）姉妹
記念美術館にて（梁川美恵子氏蔵）







完成した梁川剛一記念美術館とその館内
（梁川美恵子氏蔵）

梁川剛一記念美術館概要

住　　所	東京都中野区東中野４-20-８
敷地面積	344.025㎡
展 示 室	141.04㎡
構　　造	鉄筋コンクリート造地上３階建
１階　アトリエ・スタジオ・控え室 ２階　ギャラリー（展示室） （３階　住宅） 地階　ホール　床面積90㎡	
開館時間	10：00AM～4：30PM（夏期5：00PM）
休 館 日	月曜日（祝日は開館、翌日休館）
入 館 料	大人500円／大・高生400円／中学生以下300円

同館リーフレットより

剛一氏の作品は、遺言によりルリ子氏と美恵子氏が姉妹で共有して相続することとなり、待望の「梁川剛一記念美術館」は、1986年(昭和61)12月16日に開館した(15)。「自分の作品を散逸させずに、若い人にも見てもらえるような形で残したい」(16)という父剛一氏の念願を受け継いだ美恵子氏（代表取締役・館長）とルリ子氏（取締役）が経営にあたった。

展示部門は美恵子氏が担当し、新装間もない展示室には、挿絵原画など約50点が展示され、定期的にそのほか所蔵の油彩、素描、彫刻などの収蔵品も順次紹介された(17)。また、美術館だけでは継続して経営することは困難として地下には音楽教室と小規模

の多目的ホール「ヤナガワ記念館ホール」を併設して、ルリ子氏とご息女の典子氏が音楽担当として施設の経営に努めた[18]。

記念美術館では、「亡父・剛一は生前、若い人や少年たちのために、いつも勇気ある明るく健康な子供の絵を描いてきました。皆さんも明るく楽しい毎日を過ごして」[19]として夏休み期間に特別展が開催されるなど集客に努めたが、住宅地の真ん中という立地の悪さもあって、当初から経営は苦しく、美恵子氏も「経営した経験もなく、やったものだから」と回想するとおり、1989年（平成元）11月末日で惜しまれながら閉館することとなった。[20]

２－３　函館市への作品寄贈過程

具体的な函館市への寄贈の動きは、1989年（平成元）２月14日付の函館市東京事務所作成による「梁川剛一記念美術館に係る報告」[21]に見ることができる。

ルリ子氏ならびに美恵子氏から「郷土を深く愛した本人の意志と作品の散逸を防ぎたい」[22]として、市東京事務所、市社会教育課を通じて市立函館博物館へ受入の要請が行われたが、これを受けて博物館および関係部局で検討の結果、収蔵場所の問題が課題となるものの函館ゆかりの作家作品の作品として、一括受け入れるという方針が決定された[23]。

同年５月６日には、資料の整理状況と輸送に関する下見のため、当時の博物館の担当者だった岡田一彦氏[24]が上京、市東京事務所と記念美術館を訪問している。

現地調整のなかで、大まかながら資料点数、搬出日程や梁川家の今後の整理協力、彫塑の修復などについての話し合いが順次すすめられた[25]。

話し合いのなかでは、梁川家の意向に沿う方向での調整も進められた。市としては、寄贈を基本として話を進めたが、美恵子氏としても、父剛一氏の作品への深い愛着から、名義だけでも作品を「手ばなす」ことができなかったため、挿絵作品のみ寄託に変更されていた。

その後、６月～７月にかけて、①彫塑、遺品、関係図書、パネル等の寄贈、②挿絵の寄託、③彫塑作品の輸送前の修理・着色、④梁川剛一作品展を開催、もしくは展示コーナーを設置すること（受入から展示公開まで３ヶ年計画とし、初年度資料修復・受入、２年目は整理、３年目に展示公開）、⑤美恵子氏に資料整理指導を依頼、などの具体的方針が決定している。なお、この時点で、梁川家には、彫塑17点、原画作品など合計266件が残されたとされる[26]。

最終的な合意事項は、「梁川剛一資料の寄贈に関する覚書」「梁川剛一資料の寄託に関する覚書」としてまとめられ、寄託資料については、寄託期間は20年間で2008年（平成20）３月31日まで、寄託終了後は寄贈されることも記され、梁川家が所蔵する資料についても「近い将来に寄託する」こととされた。

合意内容に基づいて、10月17日付けで寄贈（彫塑49件、遺品23件、書籍その他一括含む）、寄託（挿絵1,327件）の申込みがなされ、市側では補正予算を計上して対応することとなった。

「覚書」に基づき、実際の受け入れ準備が整えられたが、当時の書類からは、輸送日程の打合せや彫塑作品の修復・着色資料の段取り、当初リストの不備に伴う資料点数の変更など、あわただしい状況が伝わってくる。

1989年（平成元）11月８日～10日には、梁川剛一記念美術館で修理作品の移動立ち会い・作業確認、寄贈・寄託内容の確認・資料搬出準備などの打合せが行われ、同年12月20日に梁川剛一関係資料は、11月３日に新しく開館した函館市北方民族・石川

啄木資料館[27]に持ち込まれ収蔵されることとなった[28]。

この大移動作業についても、立会学芸員の記録から、記念美術館の閉鎖を迫られるなか、多量の資料の梱包・確認作業を短時間業で行わなければならない困難な作業であったことを伺うことができる。

こうして受け入れ作業が一段落した1990年（平成２）３月23日、市長室にて木戸浦隆一市長（当時）、梁川家代表として美恵子氏臨席のもと感謝状の贈呈式が行われ、一連の資料の受け入れが完了した[29]。

３　整理作業と文学館への梁川剛一コーナーの設置

梁川剛一記念美術館では、作品管理を資料カードで行っていたが、博物館資料として登録するには記載項目が不足していたことや、記載内容の不備もあったため、受け入れ当初から再整理が必要とされていた。整理作業は、次年度から開始される予定となっていたが、一連の受け入れ作業が一段落した1990年（平成２）２月には早くも開始されている。

何とか収蔵スペースを確保し、整理作業に着手したが、当初から梁川家が希望していた常設展示への目途はたたなかった。

受入当初は先に触れたとおり、３か年程度で資料を展示する方針だったが、結局展示する場所もなく、函館市での展示利用が進まぬ一方で、1991年（平成３年）には札幌芸術の森美術館での「梁川剛一さしえ展」（３月23日～５月12日）開催のため、市立函館博物館への収蔵後初となる資料の貸し出しが行われている[30]。

函館市でのお披露目は、1993年（平成５）４月１日に函館市北方民族・石川啄木資料館がそれぞれ単独館として分離され、新たに函館市文学館[31]が開館、梁川剛一コーナーが設置されたことによる。

当時の関係者へ同コーナーの設置経緯を確認したところ、当初、文学館では、梁川剛一関係資料を展示する計画はなく、同施設の新設にあたって、木戸浦市長に対する「ヒアリング」の過程で話が浮上したらしい[32]。

岡田一彦氏によれば、美恵子氏は来函の度に、博物館長らに連れられて市長・教育長らを訪問していたらしく、資料の公開が進んでいないことを木戸浦市長が危惧していたものと思われる。美恵子氏、岡田一彦氏両氏にも確認したが、博物館への梁川剛一資料の収蔵後、展示公開について市上層部に対して要望を伝えたことはないとのことだった。

こうして、1992年度（平成４）には展示構想の策定などを開始して、1993年（平成５）４月１日の開館日には梁川剛一コーナーが設置され、ルリ子氏、美恵子氏らが立ち会いのもと、開館記念式典が行われた[33]。

４　追加寄贈および整理の現在

博物館への受け入れの後、美恵子氏の助言・協力を得ながら、資料整理や函館市文学館の梁川剛一コーナーの展示替えを行い、冒頭で触れたように『梁川剛一資料目録』の作成や、企画展の開催などが行われてきた。



函館市文学館の梁川剛一コーナー

さらに、梁川家に残された資料整理等を進め、1998年（平成10）９月２日には、挿絵原画や素描50点の追加寄託、図書43点の寄贈を受けた（これらの資料は「目録」には掲載されていないため、あらためて梁川剛一資料目録（追加）を巻末に付した）。

そして、1989年（平成元）に寄託を受けた資料および、1998年（平成10）に追加寄託を受けた資料は、2009年（平成21）４月10日に合わせてご寄贈いただき、「梁川剛一資料」は、ますます充実してきている。

現在も梁川家に残された資料および写真資料等の整理作業を継続して進めている状況である。

＊

市立函館博物館本館は、来年度で開館50周年を迎える。開拓使仮博物場の資料も引き継ぐ「歴史ある博物館」である当館の収蔵資料点数は多く、その内容も充実している。

しかし、1966年（昭和41）の本館開館時に、短期間に多量に収蔵された資料やそれ以前に収集された資料など、履歴の明らかでない資料・資料群も少なくない。

資料の履歴をしっかりと記録して、未来の「地域」へ繋いでいくことが、「地方博物館」の重要な役割の一つであることは、言うまでもない。

梁川剛一氏は、子供達へのメッセージを込めて描いた作品を大切にしていた。そして、父である剛一氏の作品をルリ子氏・美恵子氏姉妹が愛着を持って大切に引き継ぎ、市立函館博物館が所蔵するに至った経緯とその後は、本稿で紹介した通りである。

梁川剛一資料が、函館に引き継がれている意味と込められたメッセージをあらためて確認したことで、博物館のそれぞれの時代における役割までもが見えてくる。

それらの経緯を踏みしめながら、梁川剛一関係資料について、現在進めている資料整理を継続するとともに、今後とも資料の保存・活用作業を継承していきたい。

本稿の作成にあたり、梁川美恵子、折原久左エ門、岡田一彦、大島吉憲、函館市文学館（敬称略）の諸氏のご協力を得ました。この場を借りてあらためて御礼申し上げます。

（市立函館博物館学芸主査）

（１）『私のなかの歴史』６（北海道新聞社編　1986年）所収、梁川剛一「造形60年」、『研究紀要』第７号（市立函館博物館　1997年）所収、小笠原洋子「挿絵史にみる梁川剛一」など。

（２）市立函館博物館　平成18年度特別企画展「没後20年　梁川剛一」展リーフレットより転載（一部改訂）。

（３）博物館内に残されていた受入時の記録等は分散していたため再整理して、「梁川剛一資料受入・整理関係書」として１冊にとりまとめた。

（４）「記録」、1978年５月８日付の消印のある函館市助役宛の葉書

（５）「記録」、1978年５月16日「梁川剛一氏との話合い結果について」

（６）北海道道南会は、1961年（昭和36）に「楽しく集まれる「ふるさと会」」として設立された、道南出身者の親睦団体。梁川剛一は、1971年（昭和46）から亡くなるまでの15年間にわたって同会の副会長を務め、同会の集まりにも年に１回は参加していた（美恵子氏談）。『北海道道南会創立二十五周年記念誌　道南会のあゆみ』（北海道道南会　1985年）では、表紙絵を担当するとともに、ふるさとへの想いを記した一文「道南会の性格」を寄せている。

（７）函館の美術館建設運動については、『函館市史』第４巻　函館市　2002年、霜村紀子「コラム61　美術館の建設運動」に詳しい。

（８）出版社からの挿絵作品の回収について、美

恵子氏に確認したところ、剛一氏は講談社や小学館・集英社など、関係出版社に連絡して作品の返却を求めていたという。講談社はきれいな状態で保管していたが、出版社によっては、挿絵に鋏を入れるなど、保管状態が良くないものもあったという。

(９)「記録」、1978 年８月４日付「梁川剛一氏からの書簡（礼状）」。剛一氏は、高田屋嘉兵衛の七代目子孫の高田嘉七氏とも仲が良く、高田屋嘉兵衛まつりへは、度々一緒に参加していたという（美恵子氏談）。

(10)「記録」、1980 年１月 29 日の訪問記録

(11)「記録」、「梁川剛一記念美術館にかかる報告」1989 年２月 14 日　函館市東京事務所

(12)「記録」、1987 年３月８日付

(13) 金属造形作家、北海道立函館美術館の建設にあたっては、北海道立美術館運営協力会会員、募金委員会常任委員などを務めた。

(14)『梁川剛一資料目録』市立函館博物館　1996 年、梁川剛一略年譜

(15)「朝日新聞」1986 年 12 月 14 日付、「山陽新聞」1986 年 12 月 23 日付、「ひがしなかの地域ニュース」1987 年１月 26 日号

(16)「ひがしなかの地域ニュース」1987 年１月 26 日号

(17)「新美術新聞」1987 年１月 11 日付

(18)「記録」、「梁川剛一記念美術館にかかる報告」1989 年２月 14 日　函館市東京事務所、美恵子氏談

(19)「東京新聞」1987 年８月１日付

(20)「東京新聞」1989 年 10 月 31 日付、「記録」、梁川剛一記念美術館「美術館閉館のご挨拶」

(21)「記録」内

(22)「毎日新聞」1990 年３月８日付、博物館への作品寄贈時のコメント

(23) 美恵子氏によると、北海道立函館美術館にも作品寄贈を打診したが、断られたとのことだった。北海道立函館美術館は、先述の市民運動の甲斐もあって、1986 年（昭和 61）に道内２番目の地方美術館として開館していた。

(24) 岡田氏は、剛一氏との関係の深い元函館図書館長岡田健蔵氏の孫で、剛一氏による岡田健蔵胸像は、当時、市立函館図書館に飾られていた（現在は、函館市中央図書館エントランスに設置）。この梁川剛一と岡田健蔵の縁もあって館長から担当者に抜擢されたという。

(25)「記録」、「梁川剛一資料状況の確認」、1989 年６月６日付「梁川剛一資料の受入経過」

(26) 作品の件数は、1989 年 10 月 21 日教育長決裁寄託書類および同日付「梁川剛一資料の寄託に関する覚書」「梁川剛一資料の寄贈に関する覚書」による。

(27) 旧日本銀行函館支店（函館市末広町 21－７）。当初課題とされていた収蔵場所の問題について、1989 年３月の時点で「文化資料館」（後の北方民族・石川啄木資料館）への収蔵があげられていた（「記録」、1989 年３月 13 日東京事務所作成「梁川剛一遺作品の受け入れについて」）。

(28)「北海道新聞（夕刊）」・「読売新聞」・「朝日新聞」1989 年 12 月 21 日付

(29)「北海道新聞」・「読売新聞」1990 年３月 24 日付

(30)『梁川剛一さしえ展　図録』財団法人札幌芸術の森 1991。同館は、1992 年（平成４）９月 29 日に開館したばかりで、先に触れた笹野尚明氏は 1989 年４月より財団法人札幌芸術の森で美術館開設準備担当を務め、そのまま同美術館副館長に就任していた。

(31) 旧第一銀行函館支店（末広町 22－５）、1989 年 11 月、株式会社ジャックスが土地・建物を函館市に寄贈。

(32) 当時の市社会教育担当として同館の整備事業に携わっていた、大島吉憲氏談。

(33)『函館市史』年表編　函館市　2007 年、「記録」

梁川剛一資料目録（追加）

■挿絵・油彩・デッサン

目録番号	資料名	制作年	材質	サイズ(cm)
1656	アイバンホー	1949年	紙・油彩	20.8×28.5
1657	アルキメデス		紙・油彩	29.3×21.4
1658	アルプス(セントバーナード)		紙・ポスターカラー	23.5×15.4
1659	アンナ・カレーニナ	1951年	紙・ポスターカラー	30.4×30.7
1660	石の花	1956年	紙・油彩	26.6×39.2
1661	石の花		紙・油彩	26.6×36.6
1662	ウイリアム・テル	1949年	紙・油彩	21.0×28.4
1663	ウイリアム・テル		紙・ポスターカラー	17.7×11.4
1664	ウイリアム・テル		紙・ポスターカラー	18.5×12.0
1665	キリスト　十字架より降下		紙・ポスターカラー	20.4×13.8
1666	キリスト　ゴルゴダ		紙・ポスターカラー	20.4×30.7
1667	クレーブの奥方	1951年	紙・ポスターカラー	30.7×28.8
1668	黒水仙	1951年	紙・ポスターカラー	31.0×41.1
1669	コーカサスのほりょ		紙・ポスターカラー	22.3×32.7
1670	子じか物語		緬・ポスターカラー	25.5×28.3
1671	三国志		紙・油彩	27.7×20.2
1672	三国志　赤兎馬上の関羽		紙・油彩	29.3×33.6
1673	ジークフリート	1950年	紙・油彩	20.5×28.0
1674	小公子	1950年	紙・油彩	20.9×28.1
1675	小公子		紙・ポスターカラー	25.6×37.3
1676	小公子		紙・ポスターカラー	25.8×37.5
1677	小公子		紙・ポスターカラー	25.9×37.0
1678	ゼンダ城の虜	1949年	紙・油彩	21.0×28.4
1679	チャーチル		紙・油彩	29.5×21.3
1680	天正の少年使節	1949年	紙・油彩	24.4×37.5
1681	紅はこべ		紙・油彩	21.2×26.8
1682	ナポレオン　アルプス越え		紙・ポスターカラー	20.6×30.9
1683	ナポレオン　サン・ベルナール峠越え		紙・ポスターカラー	24.9×17.8
1684	ナポレオン　エジプト征服		紙・ポスターカラー、油彩	26.1×18.2
1685	ナポレオン　イタリア戦争		紙・油彩	21.1×38.2
1686	白馬の騎士	1956年	紙・油彩	16.9×24.8
1687	白馬の騎士　表紙		紙・油彩	22.0×12.6
1688	走れメロス		紙・ポスターカラー	26.2×17.3
1689	ヨーロッパの美女　クイーンマリアの衣装を着て		キャンバス・油彩	32.5×23.0
1690	ヨーロッパの美女　エーゲ海の夜明け		キャンバス・油彩	32.3×23.1
1691	ヨーロッパの美女　もう　お別れ		キャンバス・油彩	32.4×23.3
1692	ヨーロッパの美女　モーゼ像の前で		キャンバス・油彩	32.3×23.4
1693	ヨーロッパの美女　ピンクのバラ		キャンバス・油彩	32.5×23.2
1694	ヨーロッパの美女　赤いベスト		キャンバス・油彩	32.4×23.3
1695	ヨーロッパの美女　スカーフの少女		キャンバス・由彩	32.5×23.3
1696	ヨーロッパの美女　シャフハウゼンの少女		キャンバス・油彩	32.5×23.3
1697	ヨーロッパの美女　踊り終って		キャンバス・油彩	32.4×23.3
1698	ヨーロッパの美女　神秘のまなざし		キャンバス・油彩	32.4×23.3
1699	ヨーロッパの美女　スニオンの聖火		キャンバス・油彩	32.5×23.2
1700	ヨーロッパの美女　供應　トルコ帽の娘		キャンバス・油彩	32.4×23.0
1701	デッサン　女性	1949年	紙・コンテ	40.6×28.6
1702	デッサン　黒ドレスの女性	1947年	紙・鉛筆、水彩	40.8×29.6
1703	デッサン　浴衣の女性	1949年	紙・鉛筆、水彩	40.9×29.3
1704	デッサン　緑のスカート	1951年	紙・鉛筆、水彩	33.7×24.9
1705	デッサン　女性	1952年	紙・鉛筆	25.7×35.2

■図書

目録番号	書名	著者名	出版年	出版年	備考
954	世界名作全集4　乞食王子	原作:マーク・トウェーン　太田黒克彦	大日本雄弁会講談社	昭和25.6.30	装幀・梁川剛一
955	世界名作全集7　小公女	原作:バーネット　水島あやめ	大日本雄弁会講談社	昭和25.7.25	装幀・梁川剛一
956	世界名作全集8　トム・ソウヤーの冒険	原作:マーク・トウェーン　佐々木邦	大日本雄弁会講談社	昭和25.8.25	装幀・梁川剛一
957	世界名作全集11　家なき子	原作:マロー　久米元一	大日本雄弁会講談社	昭和26.3.10	装幀・梁川剛一
958	世界名作全集19　ハックルベリーの冒険	原作:マーク・トウェーン　佐々木邦	大日本雄弁会講談社	昭和26.5.10	装幀・梁川剛一
959	世界名作全集22　源平盛衰記	原作:日本古典　太田黒克彦	大日本雄弁会講談社	昭和27.2.10	装幀・梁川剛一
960	世界名作全集29　ソロモンの洞窟	原作:ハガード　高垣眸	大日本雄弁会講談社	昭和27.4.15	装幀・梁川剛一
961	世界名作全集30　覆面の騎士	原作:スコット　久米元一	大日本雄弁会講談社	昭和27.4.15	装幀・梁川剛一
962	世界名作全集32　若草物語	原作:オールコット　松原至大	大日本雄弁会講談社	昭和27.6.15	装幀・梁川剛一
963	世界名作全集35　愛の一家	原作:ザッパー　植田敏郎	大日本雄弁会講談社	昭和27.7.15	装幀・梁川剛一
964	世界名作全集43　サイラス・マーナー	原作:エリオット　吉田絃二郎	大日本雄弁会講談社	昭和27.10.15	装幀・梁川剛一
965	世界名作全集45　家族ロビンソン	原作:ウィース　阿部知二	大日本雄弁会講談社	昭和27.11.25	装幀・梁川剛一
966	世界名作全集56　オリバー・ツイスト	原作:ディッケンズ　片山昌造	大日本雄弁会講談社	昭和28.7.31	装幀・梁川剛一
967	世界名作全集58　愛の妖精	原作:サンド　桜井成夫	大日本雄弁会講談社	昭和28.8.30	装幀・梁川剛一
968	世界名作全集60　ノートルダムのせむし男	原作:ユーゴー　松本恵子	大日本雄弁会講談社	昭和28.10.31	装幀・梁川剛一
969	世界名作全集61　あしながおじさん	原作:ウェブスター　村岡花子	大日本雄弁会講談社	昭和28.11.15	装幀・梁川剛一
970	世界名作全集66　秘密の花園	原作:バーネット　岡上鈴江	大日本雄弁会講談社	昭和29.1.20	装幀・梁川剛一
971	世界名作全集68　大尉の娘	原作:プーシキン　山本藤枝	大日本雄弁会講談社	昭和29.1.20	装幀・梁川剛一
972	世界名作全集71　弓張月	原作:馬琴　高野正巳	大日本雄弁会講談社	昭和29.3.30	装幀・梁川剛一
973	世界名作全集80　赤毛のアン物語	原作:モンゴメリー　村岡花子	大日本雄弁会講談社	昭和29.7.30	装幀・梁川剛一
974	世界名作全集93　雨月物語	原作:上田秋成　福田清人	大日本雄弁会講談社	昭和30.1.15	装幀・梁川剛一
975	世界名作全集101　日本神話物語	原作:日本古典　佐藤一英	大日本雄弁会講談社	昭和30.5.15	装幀・梁川剛一
976	世界名作全集112　怪盗ルパン(5)	原作:ルブラン　保篠龍緒	大日本雄弁会講談社	昭和30.9.15	装幀・梁川剛一
977	世界名作全集114　地底旅行	原作:ベルヌ　村上啓夫	大日本雄弁会講談社	昭和30.9.15	装幀・梁川剛一
978	世界名作全集115 トム・ソウヤーの空中旅行	原作:マーク・トウェーン　白木茂	大日本雄弁会講談社	昭和30.10.15	装幀・梁川剛一
979	世界名作全集118　母の曲	原作:プローチ　村岡花子	大日本雄弁会講談社	昭和30.11.15	装幀・梁川剛一
980	世界名作全集121　あらしの九十三年	原作:ユーゴー　桜井成夫	大日本雄弁会講談社	昭和30.12.15	装幀・梁川剛一
981	世界名作全集127　黒い矢	原作:スチブンソン　野村愛正	大日本雄弁会講談社	昭和31.2.15	装幀・梁川剛一
982	世界名作全集133　アラビアン・ナイト	原作:東洋古典　大木惇夫	大日本雄弁会講談社	昭和32.9.10	装幀・梁川剛一
983	世界名作全集140　赤毛のアンの幸福	原作:モンゴメリー　村岡花子	大日本雄弁会講談社	昭和31.6.25	装幀・梁川剛一
984	世界名作全集145　開拓者バンボー	原作:クーパー　野村愛正	大日本雄弁会講談社	昭和31.8.15	装幀・梁川剛一
985	世界名作全集153　名犬ラッシー	原作:ナイト　白木茂	大日本雄弁会講談社	昭和33.8.10	装幀・梁川剛一
986	世界名作全集159　デヴィッドの冒険	原作:スチブンソン　持丸良雄	講談社	昭和34.3.20	装幀・梁川剛一
987	世界名作全集165　ゆうかんな船長	原作:キップリング　大木惇夫	講談社	昭和34.10.20	装幀・梁川剛一
988	世界名作全集166　草原のあらし	原作:カターエフ　袋一平	講談社	昭和34.11.20	装幀・梁川剛一
989	世界名作全集167　運河トンネルの冒険	原作:カーター　鳥越信	講談社	昭和34.12.15	装幀・梁川剛一
990	世界名作全集169　砂漠を越えて	原作:シェンキヴィッチ　横溝政八郎	講談社	昭和35.2.20	装幀・梁川剛一
991	世界名作全集170　秘密の小箱	原作:アルジャー　刈田元司	講談社	昭和35.3.20	装幀・梁川剛一
992	世界名作全集174　ヤンキーのゆめの冒険	原作:トウェーン　内田庶	講談社	昭和35.7.20	装幀・梁川剛一
993	世界名作全集176　日本民話集	原作:日本伝承　平野直・二反長半	講談社	昭和35.10.20	装幀・梁川剛一
994	世界名作全集178　源氏物語	原作:紫式部　佐藤一英	講談社	昭和35.12.10	装幀・梁川剛一
995	世界名作全集179　芥川龍之介名作集	原作:芥川龍之介　村松定孝	講談社	昭和36.1.25	装幀・梁川剛一
996	世界名作全集180　かもめ岩の冒険	原作:ジュール・サンドー　那須辰造	講談社	昭和36.2.25	装幀・梁川剛一

梁川剛一略年譜

年	事　項
明治35年	3月30日　梁川亀太郎、ヨコの長男として函館で生まれる。
明治41年	東川尋常小学校に入学。
大正3年	宝尋常高等小学校に入学。
大正5年	亀太郎の兄・梁川鶴松の養子となる。
大正6年	宝尋常高等小学校卒業。鉄道に勤務する父の転勤で、札幌に移り住む。
	北海中学校に入学、美術クラブ「団栗会」に所属。
大正11年	北海中学校卒業。東京高等工業学校応用化学科を受験、不合格。
大正12年	東京美術学校彫刻科塑造部に入学。
大正13年	増井多津子（戸籍名タツ）と入籍。
大正15年	第7回帝展に処女作〈競技〉を初出品、初入選。
昭和2年	第8回帝展〈審判〉入選。
昭和3年	東京美術学校彫刻科塑造部を卒業。
	函館に一時滞在、名士の胸像などを制作。
	第9回帝展〈懊悩〉入選。
昭和4年	六本木の歩兵第一連隊に入営、第五中隊に配属。
昭和5年	除隊。小学館の学習雑誌に挿絵を描き始める。
	第11回帝展〈幽昏〉入選。
昭和6年	第12回帝展〈極東の覇者〉入選。
昭和7年	第13回帝展〈決意〉入選。
昭和9年	第15回帝展〈平和工作の響〉特選。以後昭和21年まで無鑑査。
昭和10年	函館市の依頼で〈明治天皇御上陸記念碑鳳凰〉制作。
昭和11年	『少年倶楽部』で連載「黒い真珠」「魔海の宝」（松前潮のペンネーム使用）、附録「敵中横断三百里」の挿絵を手がける。
	文展招待展に〈蹶起〉を出品。
昭和12年	東京の中野にアトリエ付きの家を新築する。
	『少年倶楽部』で「黒将軍快々譚」「少年探偵団」の挿絵を描く。
	講談社の絵本『リンカーン』の挿絵を油彩で描き、話題となる。
	講談社版世界名作物語の装幀を手がけ、挿絵を描く。
昭和13年	第2回新文展に〈無敵の境を行く〉を出品。
昭和14年	第3回新文展に〈興亜の旭光〉を出品。
	聖戦美術展に〈瑞昌の人柱－細井軍曹－〉を出品。
昭和15年	中国に慰問団として出向き、海南島などで将兵の似顔絵を描く。
昭和16年	第4回新文展に〈祖國防衛〉を出品。
昭和17年	大東亜戦争美術展に〈空の軍神〉を出品。
昭和18年	第6回新文展に〈頼る可き人〉を出品。
昭和20年	空襲で自宅を焼失。妻の実家を頼り、札幌に疎開する。
昭和21年	出版社「エルム社」を設立、子供向けの絵本を刊行する。
昭和22年	北海道博覧会の大通会場の設計・正門アーチの設計を委任される。
	『北の子供』表紙や挿絵、世界名作紙芝居の挿絵を描く。
	北海道庁文化部の依頼で、道内各地で芸術文化普及の講演をする。
昭和24年	東京に戻り、中野の焼け跡に家を建て住む。
	戦後の出版界復興にともない、出版社各社の雑誌や絵本が復刊、新刊され、数多くの挿絵や装幀を手がける。

昭和30年	第11回日展に〈對策〉を出品。
昭和31年	アトリエを新築する。第12回日展に〈円盤投げ〉を出品。
昭和33年	函館開港百年記念に函館市の依頼で〈高田屋嘉兵衛像〉を制作。
昭和38年	長崎のグラバー園に〈蝶々夫人〉、〈プッチーニ像〉を制作。
	第6回日展に〈1964年（聖火）〉を出品。
昭和39年	日経連欧州経済視察団としてヨーロッパ各地を旅行。
昭和40年	北海道新聞函館版に「函館の理想像を刻む」を寄稿。
昭和41年	ゴールデン・アロー賞のトロフィーを制作。
昭和43年	札幌の小原ビル壁面に〈開拓の凱歌〉レリーフを制作。
昭和44年	ヨーロッパ、エジプト旅行。右足首を骨折し、途中帰国。
昭和48年	児童文学家協会の児童文化功労賞を受賞。
昭和50年	『梁川剛一挿画大集』を講談社より発行。
	初の挿絵原画展を東京の銀座松屋にて開催。
昭和56年	北海道大学の依頼で〈少年よ大志を抱け〉レリーフを制作。
昭和57年	妻・多津子死去。
昭和59年	「ヨーロッパの美女民族衣装画展」を銀座・中央画廊にて開催。
昭和60年	自宅を建て直し、美術館を併設する計画を立てる。
昭和61年	4月26日　脳梗塞に急性肺炎を併発し、死去。
	梁川剛一記念美術館開館（平成元年閉館）。

（2006年特別企画展「没後20年　梁川剛一」展リーフレットより作成）